小国ガイドテキスト

小国の歴史・中越地震丸かじり

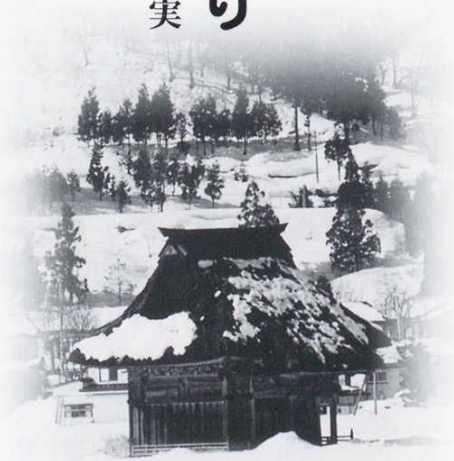
高橋　実

小国町法坂附近の航空写真

小国ガイドテキスト

小国の歴史・地震丸かじり

高橋　実



はじめに

小国町は、平成十七年四月、長岡市に編入合併し、昭和三十一年旧小国町が誕生して以来、四十年続いた行政上から消えてしまいました。そして、平成十六年の中越地震、十九年の中越沖地震と二度の大きな地震に見舞われました。

この小国の歴史を誰でもわかりやすく読める本にまとめたいという気持ちは、以前から持っていました。

確かに、昔の小国郷土史や小国町史はあるが、これらの本をどれだけの人が読み、どれだけの人が理解しているでしょう。

小学生でも読める、小国の歴史、何人かにこうした本を作ることを勧められました。ちょうど合併という大きな節目に加えて、平成二十一年からＮＨＫ大河ドラマに、越後が生んだ智将直江兼続を主人公としたドラマが展開しています。兼続ゆかりの地南魚沼市や与板・上越市では、観光客を見込んで大々的なキャンペーンが展開されています。兼続の弟小国実頼ゆかりの地小国でも遅ればせながら、「小国よっていがん会」が結成され、地域おこしの運動が始まりました。

このパンフレットが、小国にやってきた人たちの案内書になってもらえばと思って、書い

てみました。

高校生だった時に、「小国郷土史」を読んだ興奮は、今だに小国を知らせる確かな存在として、私の心奥に残っています。そして、よそからやってくる人たちに小国の良さを知ってもらい、地元に生きる人たちには、自分が生まれ、生活するこの小国を、いつまでも愛する気持ちにつながるなら、こんなに嬉しいことはありません。たとえ、ふるさとを離れてしまったとしても、我らの故郷小国を永遠に忘れないで欲しいものです。それは、この地に生れ、この地に七十年も生かしてもらった私の、この地小国への聊かの恩返しの気持ちでもあります。

平成二十一年二月十三日

高橋　実

小国の歴史・中越地震丸かじり＊目次

はじめに……1

第一部 小国の歴史

第一章 小国の地形……8
小国町、八石山 渋海川

第二章 小国の夜明け
延命寺ヶ原遺跡……13
その他の縄文遺跡……13
古代・平安時代遺跡……14

第三章 小国氏の盛衰
小国保……14
源頼政・頼行兄弟……17
以仁王伝説……19
頼継の活躍……20
幻の小国城……21
小国政光……23
大国実頼……25

第四章 江戸時代の猫の目行政
江戸時代の領地支配……28
村の支配体制……30
木喰上人と真福寺……31

第五章 明治維新と現代
戊辰戦争で小国を通過した高遠藩兵……34
地租改正による財源確保……36
小国和紙の生産……36
行政区変遷……38

第六章 小国の教育……40

第七章 小国の農業……43
生活の基盤／瀬違え田／小作争議／地租改正／農業技術の進歩
農地改革／土地改良区／小国の農業の現状

第八章 小国が生んだ人物……48
難波小右衛門／山口権三郎／野本恭八郎／山口達太郎
小川水明／滝谷琢宗／飯田貞固／松田黄峰／渡辺芝谷

第九章 小国の名所……54
山口邸／相野原観音堂／小国森林公園／小国和紙／真福寺／真光寺跡
箕輪城跡／小松入城（小国城・菅沼城）／紙の美術博物館／小国民族資料館
八王子石仏群／大塔塚／「小国氏発祥の地」石碑／小国の巨木／愛宕神社
上谷内観音堂／龍光院三十三番観音／巫女爺

第二部　中越地震
第一章　住民の底力で乗り越えた大災害
（五十嵐災害対策副本部長に聞く）……62
第五章　地割れの恐怖の中で　保坂利雄……79
第六章　病院で体験した中越地震　富沢敏一……83
第七章　直感！　震度七　山崎正治……94
あとがき……98
参考文献
扉写真　山田写真館提供

第一部　小国の歴史

第一章　小国の地形

私たちの町は小国と書いて「おぐに」といいます。発音だけでは、「おぐに」はなかなか理解できないようです。

かつて、ドイツ人の友人故ローゼレッサーさんが、わが家に来た時、「おぐに」が理解できず、Little country といったら、理解できました。小さな国、これでようやくわかったのです。

民俗学者の柳田国男は、「小国」の地名について、

二里三里の険阻の山を越えなければ、入ってゆけない川内が日本には多かった。それを住む人の側では或いはヲグニ（小国）などとも呼んでいた。出羽越後にも幾つかの小国がある。

といっています。険阻な山を越えなければ入ってゆけない土地、入ってみれば、山間の別天地のような土地が小国なのです。

わが小国の東側山脈は、東頸城丘陵関田山脈と呼んでいます。関田山脈の名前は、上越市板倉区にある山の名前で、関田山（一一一一メートル）からきています。東頸城丘陵から小国に延

び、長岡市来迎寺越路中学校のある、巴ヶ岡丘陵で終っています。

西側山脈が八石（はちこく）山脈です。小国の名山八石山（五一八メートル）を主峰に、出雲崎町小木の城付近で終っています。八石山は、米山・黒姫山とともに、刈羽三山と呼ばれ、柏崎・刈羽の人たちに親しまれて来ました。

八石山は、昔高見山・八谷山と呼ばれていました。山頂に茂った一本の豆の大木にちなんで、この山は伝説上の「八石山」と呼ばれてきました。豆の大木から八石の豆が取れたというのです。

確かに小国町は、東西を山脈にさえぎられ、南は蛇行する渋海川の険しい崖に阻まれ、その北の下流も、信越線塚山駅付近で極端に狭くなっています。小国は、どこに行くにも、山を越えなければ、よそへ行くことが出来ないのです。でもその中に入って見ると、広々とした盆地が開けています。

昭和十三年発行の「小国郷土史」には、

小国よいとこ平和の里よ
大黒様の袋のようで、
入る宝は漏らしゃせぬ

という唄が載っています。その唄の通りです。

四方に山をめぐらした独立地で、一つの小さな国をなす小国。小国は現在、長岡市に属していますが、かつて刈羽郡でした。そして中世の文書には魚沼郡小国の資料も見られます。

魚沼との境の山脈は、城山三八四㍍が一番高く、八石の壁のようにそそり立つ山容とは、大きな違いを見せています。柏崎から北条へさしかかると、目の前に迫ってくる壁のような山脈を見て、古代の人たちも不安に駆られたはずであります。八石山の裏側にある、別天地のことなど、海に面した柏崎の人たちには、想像もつかない世界であったかも知れません。その意味で小国は、柏崎刈羽の異端児的存在だったのです。その地形はまた、「隠れ里」の性格を備えています。貴種流離譚、貴人がこの地に隠れ住んだという伝説が生まれてくる所以は、ここにあるのです。

わが国には、新潟県小国町（現在は長岡市小国地域）のほかに、行政区の小国町は、山形県西置賜郡小国町と熊本県阿蘇郡小国町があります。いずれも地形的には周りを山に囲まれて似ています。

小国の中央を渋海川（しぶみがわ）が貫流しています。渋海川は、その源流を十日町市松之山地域深坂峠に発して、十日町市松代地域・十日町市川西地域仙田・小国地域に到達します。その後、長岡市越路地域を通って長岡市下山地区で信濃川左岸に合流します。しぶみの語源は、田圃に浮かぶ酸化鉄をシブとかソブと呼び、それが、語源になったといわれています。そのせいでしょうか、渋海川に沿って、鉱泉が湧き出ているところが、何箇所かあります。越路地域には、西谷鉱泉・墓間鉱泉などが知られています。北越雪譜には四郡を流れるので「四府見」とも

書かれています。頸城・魚沼・刈羽・三島・古志と沿岸の行政区域もめまぐるしく変わるために、こんな呼び名ができたと書かれています。

渋海川の特徴を一言で言うならば、曲がりくねった川だと言うことです。それは、頸城丘陵の間をくねって流れ下るためです。川西地域仙田に、二五二号線に沿って、道の駅「瀬替えの里仙田」があります。瀬替えというのは、川の瀬を変える。半円形になった部分を真っ直ぐに掘り割って、川の流れを変える工事を言います。瀬替え田を作るには、何よりも水路トンネルを掘って、川の流れを変えるところからはじめます。そして取り残された三日月湖を田圃に替えることです。これは、上流だけではありません、下流の小国地域・越路地域の平場の耕地のほとんどが瀬替えによって開拓されたものです。この川の沿岸の多くは、このようにして耕地を広げていったのです。これは、土地が少なかったので、少しでも田を広げる工夫が必要でした。渋海川に沿って遡ると、至る所に、瀬替えの田を見ることが出来ます。

小国の地図を眺めていると、北に向って泳ぐえいという魚を思い浮かべませんか？　中央に流れる渋海川はそのえいの背にあたります。

第二章　小国の夜明け

東西の低い丘陵に囲まれ、中央を渋海川が貫流するこの地に、私たちの先祖は、何時ごろ

から住み始めたのでしょう。

先土器時代といわれる時期は、今から三万年から五万年前の頃といわれています。その頃は、まだ土器が発明されておらず、先土器時代と呼ばれています。

その後に来る縄文時代は、早期・前期・中期・後期・晩期と分けられます。

この頃、小国はどんな地形になっていたのでしょう。今は、広い小国盆地に水田が広がり、豊かな実りが約束されていますが、その頃からずっとこの景色が続いていたわけではありません。

集落の点在する場所を見ても、東西の山際に集中しています。平らな盆地にたっている家や建物は、みな新しく出来たものばかりです。どうしてなのでしょう。今、渋海川は川底が深く、どんなに大雨が降っても、川筋が変わることは考えられませんが、大正年代までは、川底が浅く、大水が出るたびに川筋が変わってしまうのです。そのために、洪水の被害を避けて高台に集落を作る必要がありました。渋海川下流の塚山付近の山を崩して川瀬を変えたことが、小国地域で川底が下がった原因といわれています。

縄文時代小国盆地は、巨大な湿地帯だったといわれています。当然そんなところに住居を構えることは出来ません。

東西両山脈から舌のように丘陵が盆地に突き出ています。川の東西に緩やかに山脈に続いているのではなく、雛壇のように段段をつくりつつ山脈に続いているのです。たとえば、新町集落でも、相野原へ下りるには、低い坂があります。今の市営住宅が少し高くなっていて、

先端から盆地を見渡すことができます。これを低位段丘（標高八〇㍍から一〇〇㍍）とすると、次は小国中学校の建っている段丘です。ここは、更に一段と高くなっています。これを中位段丘（標高一〇〇㍍から一三〇㍍の間）と呼びます。そして、もう一段高いところに建っているのが、おぐに荘です。これがかってのゴミ捨て場辺りまで続いております。これが高位段丘です。

中位段丘の先端は、縄文時代の遺跡が発掘され、この時代の人たちは、中位段丘に居を構えていたものと思われます。

延命寺ヶ原遺跡

延命寺ヶ原は、上岩田の背後に小国沢川と楢沢川に挟まれた丘陵地帯で、東西六〇〇㍍、南北に八〇〇㍍に及び、現在は、小国森林公園へ通じる道路が中央に走っています。昭和四十一年、長岡市科学博物館中村孝三郎氏の指揮で、五日間にわたって、発掘調査がなされました。場所は、現在の越後製菓工場の裏手、南西に面した地点です。この遺跡の発掘で、縄文晩期（約三〇〇〇年前）の住居址が見つかりました。直径九・二㍍の円形、床面積約六七平方㍍と推定される大型の住居跡です。遺物としては、石剣・石皿・石鏃・尖頭石器が発掘されました。装飾品として鼓形耳飾が出土しました。なお古い記録には、塚・濠のあったことが記され、旧結城野小学校には発掘された石器類が陳列されていました。

その他の小国の縄文遺跡

小国の縄文時代の遺跡は、武石の国沢遺跡が早くから知られています。現在は武石の墓地・一部畑になっています。ここからは、石鏃・石包丁・石錘などが採集されていますが、この遺物はかつての旧武石小学校に保管されていましたが、今は所在がわかっていません。ほかに法末の水吉遺跡、池田遺跡は、縄文中期の遺物が採集されています。渋海川西岸にあって、原の枝村増沢から苔野島に入る郷戸山遺跡は、渋海川が大きく曲流している舌状台地上（標高一一八メートル）にあり、中期から後期にかけての甕形土器などが発掘されています。

小国で知られている縄文遺跡は、現在十一箇所数えられています。

古代・平安時代遺跡

小国町教育委員会では、昭和五十九年と平成十三年渋海川東岸大字鷺之島の御館遺跡で緊急発掘調査を行いました。これは、国道四〇四号拡張工事に伴うためのものでした。

発掘調査が進むにつれて、思いがけなくこの遺跡からは掘立柱穴群、須恵器、土師器などが発見されました。土師器には、墨書が認められるものがあり、黒色土器も検出されました。この大規模な柱穴列を見ても、単なる住居址よりも、官衙（役所）あとではないかと推定されました。御館遺跡にみる方形柱穴をもつ建物を、県内各地の類例と比較すると、和島村下ノ西遺跡、新潟市小丸山遺跡など、いずれも官衙や官衙に関連する建物遺跡とみなされており、御館遺跡も地域の有力者層の遺跡か、官衙遺跡と推定されます。この発掘によって、今

まで、謎に包まれていた小国の古代史をさぐる手がかりが得られました。当時、これだけの規模を持つ役所をもち、小国一帯を支配していた人は誰なのでしょう。しかもそこには、文字を書けるかなり文化程度の高い人物が居たのです。あるいは、後に小国を支配することになった小国氏の居館址とも考えられます。御館の地名や「中御館」の地名もその謎解きの手がかりになるかもしれません。

同じく平成十五年発掘された七日町築先遺跡では、堀立て柱跡とともに、石帯が発掘されています。新町の水上遺跡でも、ほぼ同じ時期の土器が発掘されています。今後発掘が進むにつれて、小国も古代遺跡が増え、歴史の書き換えに繋がるかもしれません。

第三章　小国氏の盛衰

小国保（おくにほ）

小国の古代・中世の歴史で見逃せないのは、地名の小国を名字に冠した名族小国氏の盛衰です。

その前に、当時の越後の国の成立をおさらいしておきましょう。

七世紀半ば、大化の改新により、天皇の支配が全国に及ぶようになるまで、越後は「越国」で、渟足柵・磐舟柵は、大和朝廷の東北蝦夷制圧の前線基地でした。大宝二（七〇二）年、頸城・

三島・古志・魚沼の四郡を、越中から分けて越後国に属せしめたと「続日本紀」に載っています。

越後の郡・郷の行政区は、奈良時代に成立したものと思われますが、「和名抄」（九二五年成立）によれば、越後は頸城・三島・魚沼・蒲原・岩船の五郡に分けられます。この中の三島（しま）郡は、現在の三島郡（さんとうぐん）ではありません。このころ、刈羽郡はまだありません。刈羽郡はこの三島郡に属していました。七郡はさらに次のような郷に分けられます。

三島　三島・高屋・多岐郷

魚沼　賀弥（かみ）・那珂・刺上・千屋

魚沼郡の中の賀弥は、現在の南魚沼郡、那珂は、現在の中魚沼郡、刺上は、後の藪上、現在の広神付近、この中で小国に最も近いのは、千屋郷です。千屋は、今の小千谷付近を指すものと思われます。現在の千谷の地名もそこから来ているものと思われます。してみると、現在は、長岡市に属していますが、その昔は、魚沼方面の影響を強く受けていることが察しられます。「魚沼郡小国保」と書かれた中世文書もあります。

小国は、古来より「小国保」と呼ばれていました。「保」は鎌倉時代から、比較的広大な地域を示す区画名です。「保」は中世の支配関係を示す名称で、「郷」とともに、国衙領だったことを示すものです。平安・鎌倉時代から、国司支配の公領が次第に荘園などを私領化するにつれて、消えて行くのですが、小国は何時までもこの名称が残りました。小国の周辺も、妻有荘、佐橋荘、薮神荘、紙谷荘などに囲まれていながら、小国は、古来より他と隔絶し、

豊な土地だったために、私領化しなかったためと思われます。

源頼政・頼行兄弟

この地を平安時代から支配していたのは、小国氏です。鎌倉幕府の日記「吾妻鑑」によると、小国氏は清和源氏の流れを汲み、源頼行をもって祖とします。源頼行は、有名な源頼政の弟です。

頼行は日本史の事典などに出てこなくても、頼政は、日本史に登場する著名な武人です。しかも、歌人でもあり、歌集さえある文武両道に秀でた、平安末期の武人です。頼政の祖々父頼光は、丹波の大江山で、酒顛童子を退治した人物として知られています。頼政もまた、宮中に夜な夜な出没する鵺（ぬえ）という怪物を退治したことで知られています。鵺とは、頭は猿、手足は虎、胴は狸、尾は蛇、鳴き声はトラツグミに似ていると言う怪物です。鳥羽上皇が亡くなると、天皇方と上皇方の間に争いが起こります。ここに、藤原摂関家も二派に分かれてどちらかに加担します。これが歴史上の保元の乱といわれるものです。天皇方の勝利に終り、負けた崇徳上皇は流罪になります。それに従った藤原頼長は戦死し、平忠正は斬首になります。頼政は、天皇方について力をつけます。その三年後には、平家方の平清盛と源氏方の源義朝の間に、争いが起こります。これが平治の乱です。これは、平家方の勝利に終り、源氏方の中心になった義朝は殺されます。この平治の乱で頼政は、源氏でありながら平家に従き、祭りあげられて従三位の位を貰います。こうして清盛の庇護の下に、出世してきた頼政です

が、次第に清盛に反旗を翻し、遂には平家打倒に立ち上がるのです。その時、反平家の旗手に不遇をかこっていた、後白河天皇の第三皇子高倉宮以仁親王を祭り上げたのです。これについては、後に詳しく述べます。頼政は反平家の戦いに敗れ、宇治平等院にて自害します。七十七歳の高齢でした。その時の辞世の歌が次のものです。

埋もれ木の花咲くことのなかりしに身のなる果てぞ悲しかりけり

さて、その弟頼行は初めて小国を領地して、姓に小国を名乗ったのです。しかし、果たして、小国にやってきて、ここに住んだのかどうかといわれると、疑問です。この頃遥任（ようにん）の官といって、地方官に任命されても、赴任しないで京都におり、政務の実際は、家人や子供にゆだねたのです。

頼行は、保元の乱では、兄頼政に対して、当然上皇方に付いたのです。兄弟が敵味方で争うことになりました。戦に負けると、敗者の処分が行われます。いわゆる戦犯裁判です。頼行も佐渡へ遠流が決まりました。

頼行はその遠流の途中に送領使を切り殺し、自ら命を絶ってしまいました。

その頼行の子が宗頼です。宗頼は、小国の地を出て、現在の新潟市西蒲区岩室温泉・石瀬の天神山城に拠点を移したといわれています（宗頼の小国開発説もあります）。しかし、これも確かなことはわからないのです。

岩室村史に「仁平三（一一五三）年、蒲原郡弥彦荘内一万六千五百貫文の地を賜り、石瀬

天神山城に墨上を築き、嫡子宗頼を居らしむ」とあります。続いて同じ書には「また安元二（一一七六）年、蒲原郡下田郷一万貫文の地を賜り、八木の地に墨を築き、宗頼をこれに移し、摘孫頼連を天神山に居らしむ」とあります。小国氏は南北朝時代南朝方だったので、敗軍となり、史書が抹殺された可能性があります。小国氏のことが蒲原方面よりの逆移入の記録が多いのはこの為と思われます。

以仁王伝説（もちひとおうでんせつ）

平成五年、東京経済という出版社から珍しい書物が出版されました。題して「皇子・逃亡伝説」。そこには「以仁王生存説の真相を探る」というサブタイトルが付いていました。作者は「柿花仄（かきはなほのか）」。そしてこの書の発端は、小国で見つかった二つの巻物でした。その一つが、小国町原の北原家に代々伝わり、二つ目が、小国町新町の高橋家に伝わる巻物でした。そして北原家の先祖が以仁王、高橋家の先祖が源頼政ではないかというものでした。

後白河天皇の第三皇子（兄の守覚法親王が仏門に入ったため第二皇子といわれます）高倉宮以仁王は悲劇の皇子です。三條高倉に御所を構えていたため、高倉の宮と言われました。母は加賀大納言季成の娘です。異母兄弟の兄は二条天皇、弟が高倉天皇に即位しました。以仁王も一時皇位継承を取り沙汰されましたが、母が摂関家の出身でなかったため、二歳の安徳天皇が即位しました。親王宣下の望みは絶たれ、政治とはかかわりない日陰者暮らしを送っていました。そして治承四（一一八〇）年、源頼政の勧めで平家追討の令旨を発し、兵を挙

げるのです。世に「以仁王の乱」とも呼ばれています。しかし、平知盛らの追撃で三井寺に逃れ、興福寺に向う途中、奈良光明山で流れ矢に当たって戦死したと、平家物語に語られています。その後、以仁王の首は都に入り、首実検されたが、以仁王を知る人が少なく、そのため、以仁王が生きているという風説がしばらく続きました。以仁王挙兵は失敗しましたが、その令旨は生き続け、諸国の源氏蜂起を促すことになりました。その頃伊豆へ流されていた源頼朝が公然と反旗を翻したのも、この令旨があったかと言われています。

その以仁王は、都をひそかに逃れ、越後小国に隠れ住んだという伝説が残っているのです。それも小国の中ではなく、遠い福島会津の大内宿佐藤家の文書に見えるのです。その逃亡のルートは、京都から大阪湾に出て、そこから水路駿河（現在の静岡県）まで行き、甲斐、信濃、上野沼田から尾瀬へ、そして会津大内宿、そして八十里越えで越後に入り、加茂の神社まで小国氏が迎えに出たと書いてあります。

小国の隠れ里については前述しましたが、貴種流離譚（きしゅりゅうりたん）の一つです。小国にはもう一つ貴種流離端の一説に、大塔宮護良親王の王統塚説もあります。身分の高い人が何かの理由で地方へ流されてしまうという、日本文学の流れをくんでいるのです。以仁王の墓は京都宇治平等院にありますが、実は新潟県でも東蒲原郡阿賀町中山（旧上川村）・三条市大字上谷地にも存在します。これは一体どうしたことでしょう。

頼継（よりつぐ）の活躍

吾妻鏡という本に建暦二年（一二一二）正月十一日鎌倉幕府の弓始めの儀式で小国源兵衛三郎頼継が、大活躍して、将軍実朝をうならせたという記事があります。頼継は、先に述べた宗頼の息子です。頼連と書かれた史料もあります。

時代は変わり、源頼朝が鎌倉に幕府を開き、武家政治が開幕していました。実朝は頼朝の孫に当たります。

その記事によれば、

正月十一日、御弓初めに、射手十人中まず頼継が召された。この頼継は天下無双の精兵として、その名を知られた人物です。当日は弓を持っていないというので、諸国から将軍に上げられた強弓を与えたところ、十五度射たのに、毎回弓の弦が切れた。射術も巧みで、中国の弓名人養由の面影を持つ。将軍も感心して、当座の褒美として越前の国稲津保地頭職を与えたという。

こんな記事が載っています。

小国氏は頼継の活躍で、全国にその名を知らしめたのです。こうした高名な武人が小国氏の中におって、ここにその居を構えていたことは、素晴らしいことといわねばなりません。越前の国（現在の福井県）の足羽郡に稲津城跡があります。

幻の小国城

その小国氏は一帯どこに住んでいたのでしょう。残念ながらその城跡を確定する確かなも

のは残っていません。

明治四十二年に発行された「刈羽郡旧蹟誌」の著者は、

その城址の如きは琵琶島・上条・北条・赤田の諸城と斉しく極めて顕著なるべきに、数個の城址について之を探検し、且つ里人に質問するも、漠として要領をえざるは、甚だ遺憾とする処なり

と述べています。

小国城はどうして幻なのでしょうか、それは、小国氏が長年にわたって、住み続けることがなく、後に岩室の天神山に移ったことに関係しているのかも知れません。それでも、小国氏の居城あとではないかといわれるものが、次の四地点です。

第一地点、延命寺ヶ原

現在小国森林公園のある一帯は、延命寺ヶ原と呼ばれる台地で、明治三十八年、関甲子次郎著「刈羽郡案内」という書物には、平治の乱には、ここに小国修理亮頼久という人物がおりました。その弟小次郎、その孫但馬守が居城で、その子結城丸が里人に馬術を教えていたと書かれています。小国氏発祥の頃は城砦より居館重視だったかも知れません。

四十ヘクタールという広大な平原は、小国氏居城址として尤もふさわしい場所といえましょう。しかも延命寺という地名が、小国氏の菩提寺と伝えられて、守護仏阿弥陀仏が延命寺ヶ原中央を流れる弥陀川を流れ下って、上岩田の阿弥陀堂に祭られているというものです。延命寺ヶ原南側下の田を丸山田が国道まで続いているのは、延命寺に砦があったことが証明されるか

も知れません。

戦前ここに「小国氏居城址」の木柱が立っていたこともあったといいます。

しかし、ここを居城址とするに、関係する地名のないこと、館と要害の関係で矛盾があることなど、数々の疑問点があり、山城研究の権威山崎正治氏は、疑問を投げかけています。

明治二十一年町村制が発足当時、かつての楢沢村・上岩田村・小国沢村・太郎丸村・諏訪井村五ヶ村が合併して結城野村が生まれました。結城野村は明治三十四年、上小国村が生まれるまで存在していました。その後も「結城野小学校」という校名が存在していました。小国氏の子孫で太郎丸・結城姫という名前があったという伝説もあります。延命寺ヶ原で本格的な遺跡発掘が行なわれれば、小国城のことがもっとわかるかも知れません。

第二地点　太郎丸城址説

二番目が太郎丸真福寺中心の居館址太郎丸説です。「丸」は城郭を意味するとするなら、「小国城の本城」と考えられます。丸を人名とするなら、長男の呼び方で、小国の惣領が館を営んだところと考えられるのであって、この地こそ小国氏の居館址であったことと考えられます。しかも近くに「小国沢」という「小国」を冠した地名が存在します。山崎氏は、小国沢川がもっと北寄りに流れ、真福寺周辺の土地が広かったことから空堀の存在も想定され、小国氏居館址の存在が十分推定されるといっています。

第三地区　鷺之島御館

小国鷺之島集落の御館は、渋海川低位段丘上舌状地帯に発達した集落で、渋海川がすぐ下

を大きく取り巻いて流れていたと考えられます。東西八〇メートル、南北六十メートルの方形を成して、広大な敷地を有しています。

非常時の要害には、断崖上の「小坂城」、川下の「中山城」、南側水田の「大沢城」を当てたと考えられます。

室町後期には、小国氏は、太郎丸からこの御館に移されていたのではないかと、山崎氏は指摘されます。

小国政光

源頼行から七代目にあたる南北朝時代、この小国政光の活躍は、目覚しいものがありました。小国政光は、兵庫頭、小国孫次郎などと称しながら、越後南朝軍の総指揮者として越後平野を縦横に駆け巡っていました。太平記によれば、当時の越後南朝軍を称して「小国・池・風間・太田皆義心金石の如くにして一度も変ぜぬものなり」と述べています。

全国的に見て南北朝の抗争は、五十年にもわたりますが、越後では、建武二（一三三五）年から正平八（一三五三）年まで十九年間でした。越後は上野と国境を接していて、南朝方の新田義貞の軍に属していました。その頃越後は、阿賀北の色部・中条・加治らの北朝方と、河内・池・風間・小国などの南朝方に色分けされていました。文書によれば、建武二年から小国氏は蒲原津に築城し、北朝軍の来襲に備えました。十一月北朝の加治景綱が来襲し、政光は迎撃し、敗れて島崎城に退却しました。翌年南朝軍は勢いを盛り返し、加治に侵入して

います。小国政光も北蒲原・中蒲原で転戦しています。正平八年小国政光は、合戦に参加しますが、興国二（一三四一）年、蒲原津城を焼かれ、翌年再起を図って挙兵してから、小国政光の名は、忽然と消えてしまうのです。恐らくこのころ戦死したものと思われます。

小国政光はこの頃、蒲原津城に居住していたものと思われます。小国の名前を冠していても、小国に居住していたのではなく、広く蒲原方面に、小国氏は強い勢力を保っていたのでしょう。

では、何時ごろ小国氏はその拠点を小国から蒲原弥彦荘天神山に移したのでしょうか。残念ながらその資料は見つかりません。「刈羽郡案内」には、小国氏の項に「蒲原櫻井郷をも合せ領す」とあります。岩室村史のなかで井上慶隆氏は、鎌倉時代既に、刈羽郡小国在住の嫡流のほかに、支族を弥彦荘石瀬に分出していたのではないかといっています。南北朝騒乱の頃には、天神山が小国氏の本拠になったのではないかとも言っています。福島市に小国出身の武石氏が住んでいますが、その武石氏は、永享元（一四二九）年、小国氏に従って弥彦荘に移ったといわれています。小国から弥彦荘に軸足を移したのは、この頃かもしれません。

小国政光が南朝勢力の棟梁として越後各地の北朝勢力に対抗するには、小国の地はあまりに遠すぎたといっても過言ではないでしょう。残念ながらそれを明確に示す資料は、未だに見つかっていません。

大国実頼（おおくにさねより）（大国と書いておぐにとよませたという説もあります）

直江兼続は、戦国武将として上杉謙信の甥の景勝に仕えました。兼続を主人公にした歴史

小説は枚挙に暇がないほどです。この武将の生き方が、後の人々の関心を引くのは、直江状のような権力の中枢にあった家康へ、一歩もひかぬ見事な生き方です。

作家の火坂雅志氏の「天地人」が、平成二十一年NHK大河ドラマに登場して、大きな話題になっていますが、信長や斉藤道三の生き方が、利を目途に権謀術数を凝らして生きていたのに、謙信や景勝・兼続の「義」のための戦を褒め称えています。

実は、この兼続の弟が、後の小国氏のルーツに連なるのです。幼少の頃、兼続の与六に対して、実頼は与七と呼ばれていました。永禄五（一五六二）年、坂戸城主長尾政景の家臣樋口兼豊の次男として生まれています。

戦国時代の上杉年譜には、永禄二（一五五九）年、大国入道が謙信に祝儀を贈ったと出てきます。天正三（一五七五）年、大国刑部少輔という名前が出てきます。これが重頼のことで、大国入道はその養父と思われます。

謙信は天正六（一五七八）年三月亡くなりますが、その跡目相続をめぐって争いが起きます。これが御館の乱と呼ばれるものです。一方の旗頭は、上杉謙信の甥にあたる景勝であり、もう一方は謙信の養子景虎です。景勝は謙信の姉婿、長尾政景の息子で、六日町坂戸城に生まれました。一方景虎は、今の神奈川県小田原市小田原城主北条氏康の息子、氏政の弟です。この乱は、景虎が生家小田原へ逃亡途中、新井の鮫ヶ尾城で自刃して、景勝軍の勝利に終わりますが、小国氏はこのとき、景勝軍に与したといわれています。

景勝は、天正九（一五八一）年、与板城主直江大和守の跡に、腹心の樋口与六（後の直江兼続）

を入れたのです。翌十年に弟の樋口与七を小国家に入れました。三河守重頼とは、刑部少輔の事で、病身のため慶長六年五月に亡くなったと書いています。重頼に子がなく、直江兼続の弟実頼をして、小国氏を継がせたと言われています。しかし、系図には重頼の子に頼恭という名前が載っています。小国氏内部でゴタゴタがあったらしいと「信頼し得る上田衆に次々と名家の名跡を継がせ、領国支配の中心にしようとした景勝の意図は明瞭である」と「小国町史」で長谷川正氏は述べています。「岩室村史」には、

天正八年六月九日付の景勝書状には、「天神山無力」とか「天神山凶事」とか妙な表現があり、石瀬天神山の小国家中に、なにか不穏な動きがあったことが察せられる。それに謙信のころ小国氏を率いていたのは刑部少輔だったのに、ここで石見守にかわっている。おそらく歴戦の刑部少輔が御館の乱開始前後に死亡し、小国家をついだ石見守が家中を掌握しきれぬまま、景勝方、景虎方のいずれにつくか意見がわかれて、動揺を続けていたのであろう、

と書き、更に

前年には不慮の凶刃に倒れた与板城主直江大和守の跡に腹心の樋口与六を入れて、この名家をつがしめている。与六は後の直江兼続で、景勝政権の執政となる。翌十年にその弟与七を小国家に入れたわけで、信頼しうる上田衆を領国支配の中枢に据えようとする景勝の意図は明瞭である。

と書いて、小国町史の文もこれにしたがっているのです。

景勝の命令で、天正十五年、小国を大国と改姓し、ついで「但馬守」に任じられています。景勝が会津に移封されると、会津で南山城の城主（南会津町田島）となり、二万一千石を賜り、米沢移封には、高畠城（東置賜郡高畠町）の城主となったのです。しかし、これを不満として、高畠に行かなかったため、兼続と不仲となり、蟄居を命じられたといわれています。

戦国時代小国氏の活躍は、目覚しいものがありました。江戸時代宝暦年間に書かれた『越後名寄』という本には、小国氏を称して「武功の家也」「世々に武功あり」などと褒めています。戦国時代頼連の流れを汲む小国氏は、まぎれもなく、武功の家として越後一円に知られていました。

第四章　江戸時代の猫の目行政

江戸時代の領地支配

戦国時代越後を支配していた上杉氏は、秀吉の命で、国替えによって会津に移りました。その後、越後四十五万石を支配したのは、堀秀治、松平忠輝でした。忠輝は、家康の六男でしたが、性質が凶暴で、家康の命令に従わなかったためです。元和二（一六一六）年、支配を解かれました。忠輝の後の越後は、その後小藩分立の体制が取られましたが、小国は牧野忠成の所領となりました。牧野氏は元和四年、長岡に移封されて、七万四千石を領して、明

近世　小国の領主・領地の変遷

		山野田	三桶	原	増沢	森光	小栗山	諏訪井	島屋敷	島新田	太郎丸	小国沢	法末	楢沢	上谷内	法坂	桐沢	七日町	苔野島	上岩田	新町	山横澤	相野原	二本柳	横沢	武石	千谷沢	上新田	下新田
	？年			原				諏訪井																					
宝永五年	1708	天領																											
正徳一年	1711	天領																										与板藩領	
享保九年	1724	天領(長岡藩預)																										与板藩領	
宝暦十年	1760	天領(高田藩預)																										与板藩領	
宝暦13年	1763	天領(出雲崎代官所)																										与板藩領	
天明8年	1788	天領(高田藩預)																										与板藩領	
寛政4年	1792	天領(脇野町代官所)																										与板藩領	
文化12年	1815	天領(白河藩預)																										与板藩領	
文政1年	1818																											上ノ山藩領	
文政6年	1823																			桑名藩領								上ノ山藩領	
文久2年	1862	長岡藩領(七日町一部天領)																		桑名藩領								上ノ山藩領	
明治1年	1868	小千谷民生局																											

代官所と代官名

年号	西暦	代官名	代官所	年号	西暦	代官名	代官所
天和1	1681	八木仁兵衛		安永7	1778	風祭　甚三郎	出雲崎
貞享1	1684	岡部治郎兵衛		天明4	1784	羽倉　権九郎	出雲崎
貞享4	1687	小野　朝之丞		寛政4	1792	山田　茂左衛門	脇野町
元禄2	1689	馬場杉右衛門		寛政10	1798	堀屋　文左衛門	脇野町
宝永3	1706	金丸　又右衛門		文化5	1808	辻　甚一郎	脇野町
宝永5	1708	金丸　四郎兵衛		文化7	1810	羽倉　左門	脇野町
宝暦13	1763	風祭　甚三郎	出雲崎	文化12	1814	佐藤　忠右衛門	出雲崎
安永4	1775	関川庄五郎	出雲崎	文化14	1816	布施孫三郎	脇野町

治四年に及んでいます。寛永元（一六二四）年には、松平越後守光長が高田二十六万石に封ぜられ、小国郷一円の領主となりました。千谷沢村にその陣屋が設けられ、三島・刈羽郡内数十ヶ村を所轄しました。しかし、延宝二（一六七四）年、その嫡子が死亡してから、跡継ぎ問題で藩が混乱し、延宝九（一六八一）年に、城地を没収されています。過酷な争いが続いていました。このように江戸時代領主が転々と変わるのは、当時の幕府の大名統制が苛烈を極めていたからです。

小国は、天和元（一六八一）年より幕府直轄領（天領）に入れられ、代官が支配しています。しかし、その代官支配がどのようになっていたのか、いまだにはっきりしないところがあります。幕府直轄地でも、与板藩や長岡藩が預かっていたようです。

領主一覧表を上表に掲げて見ます。

桑名藩は、現在の三重県桑名市です。どうしてこんな遠くの藩の支配を受けるようになったの

か、これは以前、柏崎辺りが白河藩の領地だったことによります。白川藩が伊勢桑名へ移封になり、桑名藩の支配に移ることになりました。山形県上ノ山もまた然りです。現在の長岡市七日市（旧三島町）に上ノ山藩の陣屋がおかれ、明治維新まで支配を続けました。それにしても、このように虫食い支配でどのような行政サービスが行われていたのでしょうか。隣の集落とは支配体制が違っていた場合、犯罪者が隣の集落に逃げ込んだ時には、どのようにしていたのでしょうか。

当時は、行政サービスなど殆どなく、年貢徴収のための支配が中心でした。

村の支配体制

江戸時代は、今の集落が「ムラ」に当たります。江戸幕府は、度重なる検地の実施により、今まで自分の土地を持たず、名主の家屋敷に住み、名主の土地を耕作していた下人と呼ばれる人たちにも、土地所有を認め、一人前の百姓として、年貢徴収の対象にしました。これは、年貢増収や戸数増大を狙ったものですが、結果としては小農の独立につながりました。

近世初期、小国郷における家屋調査として天和二（一六八二）年「天和検地帳」と元禄五（一六九二）年の「元禄郷鏡帳」がありますが、天和には、小国郷で三六一軒だった戸数が、それから十年後の元禄五年には、五〇三軒になっています。十年間で五割増などとは、とても考えられません。これは当然天和の頃名主に隷属していた名子が、元禄には小農として独立して、軒数に数えられたと見てよいでしょう。人口集計には、僧侶、座頭、などは入るが、

鍛冶、木挽きなどの職人は入れてありません。そのほか、渡し守などをしていた被差別民を入れていません。この元禄期は小農独立の完成期に当たっていたのです。

江戸時代の村の組織はどうなっていたのでしょう。江戸時代の村は、三、四〇軒の村が基本でした。これが現在の自治体としての村だったのです。相野原のように大きくなると二つの村に分けました。作右衛門組と七左衛門組がそれです。それぞれの村には、庄屋と組頭がいました。他の資料では百姓代が置かれているところもありますが、小国には百姓代は置かれなかったようです。江戸も中期以後の文書には、「百姓代」の文字が見えることから、その頃には、この職もあったのかもしれません。庄屋のもっとも大きな仕事は年貢の貢納です。年貢は毎年検見（けみ）という作柄調査が行われて、年貢の割り当てが決められましたが、中期以後には「定免制」といって、豊作・凶作の関係なく、年平均収量で年貢を決めたので、庄屋の苦労は大変でした。庄屋は現在の村の最高責任者で、現在の村長に当たります。封建支配体制の末端に位置し、領主に奉仕する立場にありました。庄屋の仕事は年貢の貢納だけではありません。土木工事、犯罪人処罰、代官役人接待、郷蔵の管理、宗門改め、各種証文加判、村民の生活世話、無宿者の追放など仕事も大変でした。

庄屋のほかに、「中使」という役職もありました。庄屋、組頭の指示を受け、村中へ触れ継ぎする役目です。

このほか、村の上部構造として「大肝煎（おおきもり）」と郡中組織がありました。大肝煎は近世初期、末端の支配機構が整備されない近世初期に領主が、地方の豪族に年貢徴収や人馬徴発の手伝

いを命じたことによる制度です。

木喰五行上人と真福寺

太郎丸にある曹洞宗新浮海山真福寺の長い石段を登ると、山門に立つ二体の仁王像が目に飛び込んできます。

これが木喰五行上人の彫った仏像です。近くに立っていた『結城野小学校』の校歌に「精舎の森は天をつき」の一節があるように、室戸台風で杉の大木が倒れる前には、もっと大きな杉が鬱蒼と茂っていました。

真福寺は永正二（一五〇五）年、中魚沼郡千手村（現在の十日町市川西地区）長安寺の末寺として、貫室舜理和尚により創設されました。

この入口正面の幅広い石段昇り口に

木喰五行菩薩安置之霊場

の石碑が建っています。この碑を建てたのは、真福寺二十七世住職大橋黙玄和尚です。黙玄が木喰仏保存に駆けた情熱は大いものがありました。

この仁王像は、右が「阿像」と左が「吽像」と呼ばれています。この像は他寺の仁王像のように憤怒の形相をしてはおらず、ふくよかで、どこかユーモラスな顔をしています。

この山門仁王像は、木喰上人が彫った仏像（現在六百体あると言われている）中、一木彫製としては、全国で最大と言われて、高さと重さは次のようです。

阿像　重さ　五二五キロ　高さ　二・四メートル
吽像　重さ　三七五キロ　高さ　二・四メートル

木喰上人は享保三（一七一八）年、山梨県南巨摩郡身延町古関の丸畑に生れた。四十五歳にして木喰戒（火食を絶ち、五穀を避ける）を受け、五十六歳で回国の旅に出ました。千体の造仏祈願をもって、北海道から九州まで全国を回って仏像を刻み続け、文化七（一八一〇）年、九十三歳で没したと言われています。

木喰上人が小千谷の小栗山で三十三体の仏像を彫り終え、小国郷太郎丸にやってきたのは、文化元（一八〇四）年四月一日でした。この時上人は八十七歳でした。去ったのは五月二十日、僅かに二月足らずの真福寺滞在でした。仏像の背銘に完成の年月日を入れてありますが、それぞれ次のようになっています。

阿像　享和四年四月二十一日、
吽像　享和四年五月二日
梨木観音像　背銘なし
金比羅像　享和四年八月十三日
享和四年は文化元年と重なります。

これを見ると、阿吽像はそれぞれ二十日間で彫り上げています。梨木観音像（別名立木観音）は、太郎丸の旧家上坂家の庭にあった梨の木に彫り上げた像で、天保五年この木は枯れてしまい、明治四十一年真福寺裏に堂宇を建てて安置することになりました。金比羅像は上人が

この地を去ってから彫り上げた仏像で、余所で彫ってここに持ってきて納めたものか、このころ再度来て彫ったものか、謎に包まれています。長岡市上前島の青柳家に金毘羅像を彫ったが、他に移すという文書が残っていますが、この像が金毘羅像を指すのかもしれません。

仁王像は欅の木を材料にしていますが、この木は隣村諏訪井白山神社の社木だったといいます。造仏の際のエピソードもいろいろ伝えられています。仕上げの時には、人を近づけず、夜線香の灯りで彫ったとか、大工の助手長谷川松太郎がこっそり覗いていると、背中を向けた上人が突如一喝「大工見ているな」と言い放って、彼は震え上がったといいます。

木喰上人は太郎丸を後にして、長岡白鳥の宝生寺に向かいました。

木喰を再発掘した民芸家柳宗悦は、大正十三年木喰仏を探して来越しました。その時の様子を次のように記しています。

丘を降りれば歩みは楢澤の邊りで左へと折れた。そこは刈羽郡小国郷である。川に沿うて横たはる小さな村々のうちに名ある一つの古刹がある。それは誰も知る太郎丸の新浮海禅林眞福寺である。村を下に横たへて小高き丘の上に寺はその位置を占める。眺むれば暗き杉並樹を通して白壁に輝く本堂が見える。それは元禄時代のよき様式を留める。上人はこの寺の賓客となった。彼を厚く迎へたのは、眞福寺十五代圓成和尚である。（柳宗悦選集第九巻）

木喰仏で新潟県の文化財になっているのは、小千谷市小栗山の三十三観音と、長岡市白鳥町の三十三観音だけです。

第五章　明治維新と現代

戊辰戦争で小国を通過した高遠（たかとお）藩兵

戊辰戦争とは、明治元年旧幕臣・佐幕の諸藩（東軍）と、明治政府軍（薩長勢力　西軍）との間に行われた国内の大きな戦争です。その発端は、鳥羽伏見の争いです。これは東軍の敗退となり、将軍慶喜は海路江戸に退きましたが、東北諸藩はなお同盟して、西軍に抵抗しました。西軍は東部・東山・北陸の三道に分かれて、東軍追討の兵を進めました。越後が戦火に曝されたのは、この北陸軍でした。これは北越戊辰戦争と呼ばれました。当時越後にあった東北諸藩同盟軍は、桑名藩、会津藩が中心でした。桑名藩は柏崎に、会津藩は小出・小千谷に主力を置いていました。

明治元年は戊辰の年で、旧暦では閏（うるう）月に当たっており、四月が単なる四月と閏四月の二回繰り返されました。この年閏四月、西軍は高田に本陣を置いて、海岸沿いに進む本隊と、安塚を通って山寄りを進む支隊と分かれ、本隊・支隊共に、長岡城攻略を目指しました。中心の山県狂介（後の山県有朋）・黒田了介（後の黒田清隆）は本隊にいて、二十一日に出発し、本陣は柏崎に置きました。支隊は軍監岩村精一郎が指揮し、閏四月二十一日新井から出

発して、安塚を通って千手に陣を敷きました。小千谷の慈眼寺を本陣にしていた岩村精一郎のところに、長岡藩家老河井継之助が談判に行きますが、相手にされず、長岡戊辰戦争が始まるのです。小国に関係するのはこの岩村支隊で、約千五百人の軍勢でした。高遠藩は長野県上伊那市高遠町にあり、三万三千石の小藩で、西軍岩村支隊に属していました。五月九日高遠藩は、岡野町から原へ出て、翌日塚山へ向かいました。小国谷を通過した高遠藩の小隊は、八十人前後だったといわれています。小国の真ん中を甲冑で身を固めた軍隊が通過したので、地元の人たちはびっくりしたといいます。いずれにしても、高遠藩の小国通過は、当時の大事件でした。

地租改正に拠る財源確保

明治政府は、「殖産興業・富国強兵・文明開化」の施策を実施するためには、多額の財源を必要としました。新政府発足当時の税制は、江戸時代の幕藩体制をそのまま引き継いで来たため、地方によって税制・税率に大きな不公平がありました。いまだ他産業が興らなかった時点で、税収入は土地に求めるほかはなかったのです。そこで土地を評価し、一定の税率で課税し、全国的に財源の安定を目指したのが、地租でした。明治六年に地租改正条例が施行されました。その改正点の要点は次のようでした。①土地所有者の決定。②土地価格の決定。③地価の三パーセントを地租にする。④地租は土地所有者が金納する。

前からの地券を許に、測量により、土地面積を把握する作業がはじめられました。これに

より、地引図が作成されました。前年明治五年には、地券を交付して、土地所有権を確認することにし、小国でもその作業が始まりました。

地租改正の作業も、明治十年には一応完了しました。地租は金納になりましたが、小作料は物納として残りました。この地租改正は、一般農民より地主に有利になり、後に蒲原地方に千町歩地主を産むことにつながりました。小国も農民負担は、幕藩時代とほとんど変わらなかったようです。

小国和紙の生産

和紙は、楮（こうぞ）の皮を原料にして、漉かれる紙で、小国で生紙（きがみ）と呼ばれていました。小国紙のネーミングは、古くから知られ、この地が古くから紙漉きの産地として知られていました。小国郷全体で紙漉は行われていましたが、特に上小国地区は盛んでした。

楮は、桑科の植物で、もともと山野に自生していましたが、この皮から紙を作ることを知り、産業として発達してくると、畑で楮を育てることになりました。

紙漉き村で知られる山野田では、天和二（一八六二）年、三〇戸の村で農耕の傍ら紙漉きしていたことが知られています。山深い山野田は、水田経営が不利な自然環境の中で、地味豊かな土壌が楮栽培に適したものと思われます。

紙漉の工程はなかなか複雑で、一枚の紙が漉かれるには、次のような工程が必要です。

1、楮切り　畑の楮を切り取り束ねて家に運ぶ

2、煮沸　楮を三尺に切断し、釜で蒸し上げる
3、楮引き　表皮の黒皮を削り取る
4、排濯ぎ　白皮を水洗いする
5、紙煮　白皮にソーダ灰を加えて煮る
6、紙さわし　煮皮の灰汁を取り、絞り玉をつくる
7、紙叩き　煮玉を板の上で打解する
8、ニレ　トロロアオイの根を粘液にして紙料に加える
9、紙漉　漉舟の中で掻き混ぜ、紙簀で掬いとる
10、紙干し　漉いた紙を板に張り乾燥させる

横沢の旧家山口権三郎は明治二十四年、高知県伊野町の紙漉き職人を講師に迎え、改良抄紙伝習所を開設して、小国和紙の改良に力を入れました。

行政区変遷

明治初め新潟県は、新潟県と柏崎県に分かれ、小国は柏崎県に所属していました。明治五年には、新潟県は、大区と小区の分れ、柏崎県は、十一大区と百二十七小区に分かれました。小国は第十六区に七日町、桐沢、法坂、上谷内、新町、山横沢

桐沢	横沢	武石	七日町	山横沢	千谷沢	上新田	下新田	菅沼	小坂
			第16区						
小8区									
小8区									
					千谷沢村				
					千谷沢村				
					千谷沢村				
					千谷沢村				
					千谷沢村				
					千谷沢村				
								越路町へ	

が入っていました。第十七区に楢沢、太郎丸、小国沢、法末、諏訪井、島屋敷、島新田がはいっていました。

その時は、現在の各集落がそれぞれ村を構成していました。大字太郎丸が太郎丸村、大字新町が新町村という風でした。ただ、その頃上新田・下新田、今はなくなってしまった集落も含まれています。

それが明治二十二年市町村制が施行され、町村合併が進められました。

千谷沢村（千谷沢・上新田・下新田）
中里村（新町・相野原・二本柳・上谷内新田・法坂・桐沢）
増田村（山野田・三桶・苔野島・原）
結城野村（諏訪井・太郎丸・小国沢・上岩田・楢沢）
森山村（小栗山・森光）
法末村（法末）

町の変遷（「閉町記念誌」34頁掲載を元に池島嘉和氏の表参照）

		大貝	山野田	三桶	苔野島	原	増沢	諏訪井	島屋敷	島新田	太郎丸	小国沢	楢沢	上岩田	小栗山	森光	法末	新町	相野原	二本柳	上谷内	法坂
						原		諏訪井														
明治5年7月	柏崎県に所属		第18区					第17区						第18区			17区	第16			第16区	
明治5年8月	大区小区制実施第6大区	小7区																				
明治6年	新潟県に所属	小7区																				
明治12年4月	大区小区制廃止 刈羽郡となる																					
明治22年	市町村制施行		増田村					結城野村							森山村			中里村				
明治34年	上小国村誕生		上小国村															中里村				
昭和23年	小国村誕生		上小国村																		小国村	
昭和27年	仙田村大貝編入	上小国村																			小国村	
昭和30年1月	山横沢村編入	上小国村																			小国村	
昭和31年9月	小国町誕生	小国町																				
昭和32年7月	千谷沢村分割編入	小国町																				
平成17年4月	長岡市に吸収合併	長岡市																				

武石村（武石）
七日町村（七日町）
横沢村（横沢）
山横沢村（山横沢）

この十か村が生まれました。その中でも上地区は、明治三十四年増田村、森山村、結城野村、法末村が合併して上小国村がうまれました。中里村・武石村・横沢村・七日町村が合併して、小国村が生まれるのは、昭和二十四年七月のことでした。昭和二十七年には、中魚沼郡仙田村大貝が上小国村に合併し、昭和三十年には、山横沢村が小国村に合併しました。小国町が誕生したのは、昭和三十一年九月三十日でした。翌年千谷沢村が小国町に吸収合併しました。

こうして、平成十七年四月一日、小国町は中之島村・越路町・三島町・山古志村とともに長岡市に合併しました。その後和島村・寺泊町・栃尾市・与板町が合併し、現在の新しい長岡市となりました。

第六章　小国の教育

明治五年、学制が頒布され、それまでばらばらに行われ

七日町小学校	武石小学校	千谷沢小学校
下小国小学校		
下小国小学校		
下小国小学校		
下小国小学校		
下小国小学校		
下小国小学校		
下小国小学校		

ていた教育が、国家の事業として行われるようになりました。それ以前、小国では各地に寺子屋があり、子供達の教育に携わっていました。その草分けともいえるのは、太郎丸真福寺十世の月相江円が、退隠後、宝暦年間に、旧境内に開いた知足庵という寺子屋です。近所のこどもたちを集めて、習字を教えたといわれています。これ以外に、諏訪井の長谷川家、苔野島の中村家、森光の田中家などが寺子屋を開いていました。寺子屋ではありませんが、慶応年間、琢宗禅師が、近村の子弟に漢籍や漢詩を指導しました。これは、初歩の勉強より少し高度の勉強のようです。さらに小国地主階級の子の中には、鯖石谷の南条にあった三余堂で、学んだ人も居ました。小国の大庄屋山口権三郎などは、ここで学んでいます。

学制が施行されたころ、小学校は尋常科四年（後に六年に延長される）、高等科は二年でした。そのころ、小学校を終えて、中学校もありましたが、これは旧制中学とよび、都会にあって、選ばれた一部の人が学ぶ学校でした。近隣では、長岡・柏崎・小千谷に中学校がありました。昭和十

小学校統合一覧

	結城野小学校	森光小学校	増田小学校	増田小学校三桶分校	増田小学校山野田分校	法末小学校	中里小学校	八王子小学校	中里第2小学校	横沢小学校
昭和32年									小国橋小学校	
昭和36年									小国橋小学校	
昭和37年									小国橋小学校	
昭和45年	上小国小学校								小国橋小学校	
昭和53年	上小国小学校								小国橋小学校	
昭和55年	上小国小学校						中里小学校		小国橋小学校	
昭和61年	上小国小学校						渋海小学校			
昭和63年	上小国小学校						渋海小学校			

六年になると、名前が国民学校と変わり、尋常科を初等科と呼ぶようになりました。昭和二十二年また小学校にかわり、新しく中学校三年が義務教育となりました。この時の中学校を、新制中学と呼んでいます。

明治になって、学制が施行された頃、小国には太郎丸校や原校と呼ばれる学校がありましたが、やがてつぎのような小学校になりました。

結城野小学校
法末小学校
森光小学校
増田小学校（三桶分校・山野田分校）
中里第一小学校
中里第二小学校
七日町小学校
武石小学校
横沢小学校
山横沢小学校
千谷沢小学校（菅沼分校）

こうした小学校は、子供数が減少するにつれて、次ぎ々と統合を繰り返し、現在は

上小国小学校

渋海小学校
下小国小学校

と三校に減ってしまいました。

また昭和二十二年の新しい学制で中学は

上小国中学校
中小国中学校
中里中学校
渋海中学校
千塚中学校

五つでしたが、これも次々と統合し、今は小国中学校一校になってしまいました。これからも小国のこども人口が減るにつれて、統廃合を重ねてゆくに違いありません。

第七章　小国の農業

生活の基盤

小国の人々がこの小国盆地に居を構えてから、生活の基盤は、太陽と水と大地の恵みを受ける農業でした。この地に人が住みついてから、この大地からの贈り物である米や野菜、そ

して木の実を収穫し、それで生活の糧をえていました。
歴史の上からも、奈良時代から貴族たちが土地の所有者として、荘園とよばれる土地から上がる公租収入を、生活の基盤にしていました。

瀬違え田

江戸時代にも検地が行われ、土地の測量を行って田地を反別・品質にわけ、そこから米の貢納がスムーズに行われるようにしました。今残っている天和の検地帳には、夫々の田地を上田・中田・下田・下々田にわけ、持ち主・そこから上がる収穫量を石高であらわしています。集落の全体の石高や人口も記しています。この頃村の庄屋の最大の役目は、年々の貢納をスムーズに納めることでした。何時も天候が順調というわけではありません。洪水や冷害で収穫量も大きく左右されます。
少しでも田を広げ、収穫量を増やしたいという願いから、田を切り開く苦労もありました。水源を探し、灌漑用水を確保し、鍬一丁で田を開くのです。川筋をまっすぐに変えて、今までの川筋を田に変える事業も度々行われました。こうして出来た田を、瀬違え新田と呼びました。渋海川にはこうした新田をいたる所に見ることが出来ます。

小作争議

江戸時代、土地は領主の所有と考えられていましたが、明治政府は古い制度を撤廃し、土

地売買の自由や農作物の自由栽培を認めることにしました。
支配者との間に軋轢も起ります。聞き入れない時には、それが百姓一揆とよばれる反対運動まで発展することもありました。寛文年間（一六六七）武石村の庄屋難波小右衛門のように、幕府の米倉を勝手にあけて、農民に分け与えて処刑された庄屋も出ていました。
明治前期、わが国の財源の殆どは、農村に依存して、政府は農業政策を積極的に押しすすめました。農業県としての新潟県は農業生産額・農業人口ともに、全産業の八割か九割を占めていました。これはわが小国も同じことです。
大正の終わり頃は、農家は耕地をもっている地主とそれを借りて耕作している小作とに分かれていました。そして小作は、土地を借りている代わりに小作料を地主に納めていました。その小作料を減らしてもらう運動が全国的におこりました。大きな地主がたくさんいる新潟県にその小作争議が一番多く起こりました。小国でもそれは例外ではありません。この地主対小作の争いは、昭和初めまで続き、戦後の農地改革で小作していた土地が耕作者に安く売り渡されたことでなくなりました。当時の収穫量は一反（十アール）に六俵といわれ、そのうち三俵が小作料でした。

地租改正

明治に入ると、明治政府は富国強兵・文明開化の施策に、多額の財源を必要としました。それで、地租改正という土地課税制度の変革を行いました。いままで持っていた土地の私有

を認め、地券を発行し、そこから今までの物納から金納へ税制を変えようとしたものです。

明治以降の稲作技術で目立つものは、虫害対策と米質改善策の二つでした。明治末期に石油乳剤の普及で、稲の害虫防除対策がすすんだことです。共同作業として種籾の塩水選、共同苗代が普及しました。

農業技術の進歩

更に農業技術の進歩で、牛馬を使った耕作が広まりました。馬耕は、人力の五倍も早かったといわれています。しかし、雪国小国では、長期に渡って牛馬を遊ばしておかねばならず、それほど普及しませんでした。

農業に石油発動機が使われるようになったのは、第一世界大戦前後の大正初めからでした。塚野山掘割瀬変え工事によって、川底が浸蝕低下して灌漑用水が確保できなくなってからです。動力の揚水機を使って灌漑用水を汲みあげ、この悩みが解決されました。そして、石油発動機によって脱穀・調製が行われるようになったのは、昭和三年以降でした。秋の収穫作業は、千歯扱きから足踏み脱穀機・動力脱穀機、動力籾擦り機へと、飛躍的に発展することとなりました。

昭和十六年の統計では、足踏み脱穀機四十三%、石油発動機利用二十%、電動機使用は三十%となっていますが、小国ではまだまだ足踏み脱穀機が多く、動力脱穀機が普及するのは、昭和二十年代になるのを待たなければなりませんでした。

農地改革

日本が敗戦によって占領軍の支配下にはいると、財閥解体や労働三法とともに、占領軍（GHQ）が着手したのは、地主小作制度に縛られた日本の農業政策の転換でした。地主制度をなくして、自作農を育成しようとしたものでした。この実施にあたっては、地主側小作側から選ばれた農地委員会が中心になりました。政府が安い価格で農地を買い上げ、これを小作者に売り渡そうとするものでした。内地地主の保有面積は、平均一町歩としました。山林は解放の対象外としました。この農地改革には、様々な矛盾がありましたが、農地改革後の農村は活気に満ちていました。

土地改良区

農業経営を合理化して生産力を高め、食糧増産を目当てに、昭和二十九年、土地改良区が発足した。この事務所では

1、区画整理事業
2、かんがい排水事業
3、新設農道事業
4、小団地農道事業
5、災害復旧事業
6、換地事業

など事業範囲は多岐に渡っていました。

昭和二十九年に千谷沢村で始まった第一次区画整理事業は、小国町合併後も引き継がれ、昭和三十六年度、平坦地六百町歩が一反（十アール）区画として農道・水路ともに整備され、昭和四十一年度、延命寺ヶ原開田工事を加えて、小国町の近代機械化農業への地盤が確立されました。渋海川から灌漑用水を揚げる用水機場も、昭和五十年まで十二箇所に新設されました。今まで人力のみに頼っていた農業も、機械力導入と幹線水路の完備により、合理的農業経営が可能となりました。

小国の農業の現状

昭和から平成に変わって、農業中心の町の生活形態が、近隣市町村の工場や大型店へ通勤するサラリーマン生活に変わってきました。そのため、冬期は出稼ぎしていた人達も、正社員として通年で勤務するようになりました。出稼ぎ者も数をひそめ、農業形態も大きな変化をとげました。

小国の著しい変化は、なんといっても人口減少です。下の表を見ていただきたい。小学生の数は昭和四十年に比べて平成二十年は実

小国地区人口変遷

和暦	西暦	人口	世帯数	小学生	中学生
昭和30年	1955	16121	2937		
昭和40年	1965	12517	2672	1658	921
昭和50年	1975	9662	2322	911	550
平成元年	1988	8,589	2,193	568	308
平成10年	1998	7776	2,218	443	302
平成20年	2008	6576	2,115	270	177

に一六％におちこんでいます。若い人たちはどんどん都会に転居して、村に残ったのは老人ばかりになりました。六十五歳以上の人が集落の半数を超える、限界集落という言葉が使われるようになってしまいました。

一方田圃も再基盤整備で、一枚の田が一ヘクタールという大規模なものにかえられ、経営者も大型機械を導入して、共同で経営するやり方に変わってきました。そのため、手のかかる谷間の棚田がどんどん耕作されなくなって、原野に変わりつつあります。これから十年後、二十年後の小国の農業は、大きく変わってゆくことでしょう。

第八章　小国が生んだ人物

長い小国の歴史の中で、この小国郷でも名を馳せた、多くの人物を生み育てました。

①難波（なんば）小右衛門（こうえもん）

武石集落の小高い丘に、難波小右衛門の首塚といわれる石塔がたっています。江戸時代中頃、武石村の庄屋だった小右衛門は、天候不順で飢饉に見舞われた村人を救おうと、御蔵米の払い下げを願いましたが、聞き入れられず、無断で蔵の鍵をあけて、窮民に配りました。このため小右衛門はとらえられて斬首となってしまいました。集落の片岡八郎右衛門は、

その首をひそかに運び、村内の一の坂という場所に葬りました。そこが小右衛門の首塚といわれているところです。大正三年、難波家の前に小右衛門の顕彰碑が建てられました。

②山口権三郎

横沢の大庄屋山口家の長男として、天保九（一八三八）年に生まれました。明治十二（一八七九）年、第一回新潟県議会選挙に立候補して県会議員になり、第二代の新潟県議会議長となりました。鉄道事業の大切さにも注目して、明治三十一（一八九八）年には、直江津・新潟間の信越線開通にも尽力しました。当時石油産業の重要性に着目し、明治十九（一八八六）年、石地の内藤久寛と協力して、日本石油会社を興しました。実業人を育てるには、実業学校が必要と、明治二十九（一八九六）年、長岡実業学校を設立しましたが、残念ながら数年にして廃校になってしまいました。当時石油は、石油ランプしか需要がありませんでした。石油ランプにかわる新しいエネルギー源として電気に注目し、小千谷に水力発電所を作りました。

そして、あらゆる産業の中心には銀行業があることを自覚し、小千谷金融会社・長岡銀行（明治二十九年）などを興すのに力を貸しました。創立時には、長岡銀行の初代頭取となりました。この銀行が合併を重ねて、今の北越銀行に受け継がれています。

こうして権三郎は、明治の新潟県の実業界に大きな足跡を残して、明治三十五（一九〇二）年、六十四歳で亡くなりました。

③野本恭八郎（互尊）

山口権三郎の弟野本互尊は、生誕地小国より旧長岡市で名をなしています。野本恭八郎は嘉永五（一八五二）年、山口家に生まれていますが、権三郎の十四歳年下でした。二十一歳で長岡野本家に養子にはいりました。そこで宗教家大道長安に出会い、清廉な生き方を学びました。その影響のもとに互尊・独尊の考え方が生まれてきたと考えられます。独尊とは、この世界で唯一生きている自分を生かすことで、互尊とは、社会で一緒に生きようとする考え方です。この考え方を貫けば、この世に争いがなくなるというものです。この考えから大正四年互尊文庫を寄付して、同七年に開館しました。これが現代の長岡中央図書館に引き継がれています。昭和十一年死後、彼の残した記録から互尊大学や互尊公園などの構想が練られていたことが判明しました。現在の生涯教育に通じるものがあります。

④山口達太郎

安政五（一八五八）年六月九日、権三郎の長男として生まれました。父の事業を受け継ぎ、日本石油会社取締役、新潟鉄工所社長などを歴任しました。明治三十七（一九〇四）年、衆議院議員に選ばれます。権三郎の遺志をついで小千谷塩殿発電所を竣工し、発電事業を興します。藍綬褒章の基金をもとにして山口奨学資金として学生に貸し付け、事業を始めます。大正九（一九二〇）年六十三歳で亡くなりました。

⑤小川水明

歌人小川水明は、明治二十五（一八九二）年、刈羽郡相野原にて生まれました。父、小川右膳、母織意の長男として生まれました。明治四十二（一九〇九）年、新潟師範学校へ入学すると、三年に哲学者として名をなした、佐渡出身の土田杏村がいて、生涯の友となりました。翌明治四十三（一九一〇）年、若山牧水が短歌雑誌『創作』を創刊すると、入会してここに短歌を寄稿し、若山牧水と交流を深めることになります。大正三（一九一四）年に『創作』は小川水明特集を組みます。大正四（一九一五）年には、第一歌集「生霊」を発行します。ここには、若山牧水が序文を載せ、土田杏村が跋文を載せています。大正七（一九一八）年には、自ら主宰する短歌雑誌『光陰』発行します。この雑誌は七号まで続きますが、資金不足で翌年休刊します。この同じ年第二歌集『水明歌集』を発刊。ここには、序を暁烏敏、西田幾太郎が書いています。昭和五年、第三歌集『有明雲』発刊。昭和十一年、坂本凱次編集の『武蔵野』を『山桜』と改題し、主宰者となるのですが、昭和十二年、治安維持法違反で逮捕され、昭和十五年五月自ら命を断ちました。四十八歳でした。

⑥滝谷琢宗

「生を明らめ、死を明むるは、仏家一大事の因縁なり」から始まる「修証義」は、曹洞宗の祖道元の教えを分かりやすく説いたものです。その編集責任者としてあげられるのが、滝谷琢宗禅師です。琢宗は天保七（一八三六）年、現在の十日町市赤谷の小川六左衛門の

長子として誕生しました。太郎丸真福寺で幼いころ修行して、成長後東京駒込の栴檀林に学びました。村松（現五泉市）の慈光寺住職のころ、明治政府は廃仏毀釈という制令で仏教を弾圧しましたが、琢宗はその非を説いて回りました。明治十八（一八八五）年、総本山永平寺の六十三代貫主となりました。貫主とは、その寺の最高責任者です。そのころ曹洞宗は、永平寺と総持寺に分かれていて、争っていました。琢宗はこの両寺の融和に奔走しました。真福寺は、琢宗の故山として、事あるたびにこの寺に戻ってきました。太郎丸中島家から養子を迎え、明治三十（一八九七）年、六十二歳で亡くなりました。

⑦飯田貞固

明治十七（一八八四）年、父飯田貞一、母サダの長男として、現在の小国町八王子（当時山横沢村）に生まれました。陸軍大学校を卒業後、大正三（一九一三）年、第一次大戦青島攻略に参加します。大正六年、参謀本部付となってヨーロッパに派遣されました。大正十二（一九二三）年、イタリア大使館付駐在武官に任命されます。昭和八年陸軍少将、盛岡市騎兵第三旅団長に任命されます。昭和九（一九三四）年、群馬県と周辺県での陸軍特別大演習にて、戦略家としての力量を認められ、大きな成果を挙げる結果となりました。昭和十一年陸軍中将、十二年近衛師団長となります。昭和十四（一九三九）年、第十二軍司令官として中国山東省済南に赴任します。十六年解任され、予備役に編入されます。戦争がはげしくなり、昭和十八年、出雲崎尼瀬に疎開します。昭和三十七年、故郷の神社石

段登り口に「飯田貞固翁の碑」と、当時大蔵大臣田中角栄の揮毫による碑が建てられました。昭和五十二年、埼玉県狭山市で九十三歳で亡くなりました。

⑧松田黄峰

幕末の文人画家として名を馳せた人です。安永二（一七七二）年、小国町法坂に生まれ、法名道淳。巴山・素庵・如雲・少林ともいわれました。十日町市下条新保広大寺の十九世住職となります。和歌山の野呂介石に画を学び、山水花竹の画を得意としました。頼山陽に師事したこともあります。当時の名人、岡田米山人、岡田半江と技を競うほどの勝れた画家でした。天保六（一八三五）年二月二十八日、六十四歳で亡くなりました。大正六年、法坂地内に石碑が建てられました。

⑨渡辺芝谷

幕末・明治の文人画家として名をなした渡辺芝谷は、文政十一（一八二八）年、小国町上岩田渡辺家（屋号ふるざかや）に生まれました。別に厚庵和尚、逸淳ともよばれ、法名大淳。十日町市下条新保広大寺徒弟として、後に塩沢雲洞庵執事となりました。小千谷市岩沢西岩寺十七代住職となり、地蔵堂富取芳齊に画を学びます。同郷の画家黄峰を深く敬愛し、追悼画集を編集しました。そして中国に留学し、南画を勉強します。帰国後は十日町市正念寺前寺最勝寺に住み、画室を碧落山房とよばれました。門人十日町の二瓶雪峰

がいます。明治三十三（一九〇〇）年十二月二十七日、七十三歳で亡くなりました。

第九章　小国の名所

1、山口邸

小国町横沢にある大庄屋山口家住宅跡。山口権三郎以下三代に渉り、富をきずきました。現在は山口育英奨学会事務所となってます。郷土資料館「敬山閣」があります。

2、相野原観音堂

小国町相野原の田圃に建つ観音堂。馬頭観音が本尊。かつて渋海川の洪水により、上流仙田村（現十日町市）岩瀬から流れてきたといわれます。明治から大正にかけて、八月十日に観音堂の祭りに馬が集まり、押しが行わました。

3、小国森林公園

小国町上岩田地内の自然公園。昭和五十四年八月開園。キャンプや自然探索が楽しめます。養楽館で入浴や食事もできるし、みんなの体験館では、郷土料理や藁細工の体験もできます。

4、小国和紙

小国町小栗山と苔野島で漉かれている和紙。小国和紙は古くから小国各地で、冬季間の副業として漉かれていました。明治時代には、諸帳簿、台帳、障子紙など需要も多くありました。今は民芸品、酒瓶のラベルとしての需要があります。現在小栗山の和紙生産組合で、大々的に漉かれています。昭和四十八年、国の無形民俗文化財に指定されました。

5、真福寺

曹洞宗新浮海山真福寺。永正元（一五〇五）年開祖。初代貫室舜理和尚。文化元（一八〇四）年、木喰五行上人がここにきて、仁王尊像・梨木観音像・金毘羅大権現像を刻みました。

6、真光寺跡

森光にあった浄土宗寺院跡。盛光寺と呼ばれた真言宗寺院でした。森光はかつて中村と言われました。小国頼行の末流小国盛光は、寛元二（一二四四）年、八谷城の戦いで北条軍に敗れ自害しました。子が父の菩提を弔うために建てた寺。以後中村は盛光と称し、後に森光と改称しました。境内に栃の大木。森光疎水碑が建っています。

7、箕輪城跡

小国町箕輪集落裏手にある城址。

小国頼連の一族、主馬頼平が住んだ城です。後に大脇と改姓。頂上から小国平野を一望できます。

8、小松入城（小国城・菅沼城）

小国町楢沢と小国沢との境界にあった城。延命寺ヶ原の東側尾根伝い関田山脈に続いている地域にあります。越後軍記類には、小国城は小国保にありというだけで、その場所を明確にしていません。「温故の栞」には、「三郎頼連初めて小国保を領して代々相伝う」とあります。ここから小国盆地を一望でき、外の山城と連絡のできる要衝に当たります。

9、紙の博物館

建物は平成四年、オプスタワーとして建築家毛綱毅曠氏が設計されました。世界中の紙を展示しています。照明の効果で光と和紙の風合いが融合したエントランス、紙を全面に使用した紙の部屋などがあります。四階は、友好都市武蔵野市から寄贈された蔵書を保管公開する「愛蔵書センター」に、六千冊の本が保管されています。

10、小国民俗資料館

小国町新町地区、小国公民館に隣接されている。小国での発掘土器類、小国和紙資料、

近世古文書、小国氏、郷土出身者著名人の遺品など、二百五十点が展示されています。

11、八王子石仏群

小国町八王子集落地蔵堂境内に、多くの石仏・石像が立っています。地元に勝れた石工がいて、多くの勝れた石仏・石像を残しました。手に持った錫杖に十字架が見られ、隠れキリシタン信仰の名残が見られます。

12、大塔塚

小国町苔野島字みささぎのある陵墓。鎌倉時代大塔宮護良天皇の墓所といわれています。護良親王は後醍醐天皇の第二皇子です。室町時代足利尊氏と直義の間に対立があり、直義は護良親王をとらえ、牢に入れてしまいました。直義鎌倉を去るとき、親王の殺害を命じましたが、殺害を命じられた渕辺伊賀守が、潜かに宮を匿って越後へ逃したといわれています。そしてこの地に隠れ住んで亡くなったといわれます。近くにはお供塚といわれている所もあります。

一説にはこれは、平安末期高倉以仁王遷去の地とも伝えられます。

13、「小国氏発祥の地」石碑

小国町上岩田の森林公園駐車場に建っています。平成十五年八月、大国氏一族初め二五

○人の募金者によって、建てられました。（この碑の南西部に小国氏の居館があったという説もあります）

碑面文字…難波正久氏　副碑・撰文…山崎正治氏　文字…松田華心氏

14、小国の巨木

小国各地に巨木が立っていて、大貝神社のスギ、苔野島中村家の樫、森光真光寺境内のトチとイチョウ、法末大橋家のイチイ、相野原住吉神社のケヤキ、押切戸隠神社の大イチョウなどが知られています。

15、愛宕神社

法末集落南端の高台に立つ愛宕神社。眺望絶佳、小国盆地、魚沼連峰を一望することが出来ます。火伏の神として信仰されています。

16、上谷内観音堂

小国町上谷内集落裏山高台に立つ観音堂。盲人男谷検校の位牌があるところです。小国三十三観音一番札所。

17、龍光院三十三番観音

千谷沢龍光院は、曹洞宗の寺。ここに小国氏一族、佐藤義信南蛮鉄位牌が安置されています。二十世善隆上人が寺裏山の景勝地に三十三観音像をたて、西国三十三番霊場を模し作られました。

18、巫女爺

小国町太郎丸集落に伝わる民俗芸能。爺さと巫女の二体の人形を、後ろから二人で手をいれて踊らせます。元治元年、小千谷から伝わったといわれています。戦後一時途絶えたことがありましたが、昭和四十八年に復活しました。毎年四月、新浮海神社の祭りに奉納されます。平成十九年、小千谷・越路等十地区の巫女爺と一緒に、新潟県の文化財に指定されました。

第二部　中越地震

（この項「小国文化」三〇号二〇〇四年十二月発行より一部増補）

第一章　住民の底力で乗り越えた大災害

町助役　五十嵐災害対策副本部長に聞く（平成十六年十一月二十五日　小国町役場談話室にて）

聞き手　高橋　実（編集部）

連絡網の途絶

質問　地震発生当日の様子は如何でしたか。

答え　地震当日は、十八時二十分災害対策本部を立ち上げました。地震発生当時、一番困ったのは連絡網が遮断されたことです。情報収集に手間を取りました。ライフライン電話・携帯電話・行政防災無線が通じず、外部と連絡が全く取れない状況が丸二日間、こんなに歯がゆいことはありませんでした。命がけで二十四日夜、柏崎の消防本部に行ってもらいました。電話が通じないので、柏崎に飛んで消防署で無線を飛ばして、柏崎市役所から県へ連絡をとる方法を取りました。職員を町内に飛ばして被害状況把握に努めました。次に連絡網の確保ということで、衛星無線を使った電話機を頼んだり、夜間の投光機の設置、仮設トイレ、避難所の手配をしなければなりませんが、二日間は連絡が取れず、もどかしい思いをしました。行政防災無線も連絡が取れない。小国と川口が同じ状態でした。情報

のエアポケットになっていました。今まで小国町では、豪雪・水害で対策本部を設置したことはありますが、こんな大規模に設置したのは、勿論初めての経験でした。

質問　防災無線の不都合はどうしてですか。

答え　非常用電源に通じなかった。常用電源につながっていた。電気が消えるというのは、考えていなかったようです。そこに問題があったと思います。その後、すぐ直しました。今後非常用電源が作動するかどうか、日常点検する必要があると思います。

質問　災害対策本部というのは、今の職員を幾つかに分けて仕事分担するものですか。

答え　現在の課体制を基本にし、土木課は道路関係、農林課は農地関係、それぞれ所管するところを担当してもらいました。

避難所設定

避難所は、公共施設を調べて、就業改善センター、農環センター、勤労者体育館、上小国小、渋海小が何とか使えることがわかり、そちらを避難所に指定しました。地区では、法末が道路決壊で車が行けず、孤立状態となり、山野田は倒木が道路を塞いでいて、それを取り除くのに二日間かかりました。その後は、ひまわり保育園と検診棟に避難所を増やしました。最終的には、七箇所に避難所を設けました。一番多かったのは、十月二十五日、千八百三名でした。残りの人の殆どが、車の中やドーム型の車庫に入って過ごしました。職員は二十四時間勤務で、一週間程度続き、夜はマイクロバスや庁舎の中で仮眠しました。始めは避難所

の確保や外部連絡、消防団への要請で過ごしました。情報の収集に苦労しました。法末では人工透析患者や車椅子の人も居るため、地元業者に頼んで、道路確保に奔走しました。

ライフラインは二十六日夜に、電気と電話も通じ始め、三十一日には全面的に電気が復旧しました。水道関係は二十九日に全面復旧、山野田、法末の簡易水道も十一月五日に復旧しました。下水道は二十七日から使用しながら、復旧に努力しました。電話は、二十四日に衛星電話を設置しました。二十六日に電話が漸く使えるようになりました。それまでは、七台の衛星電話を架設して、朝暗いうちから夜遅くまで、安否の情報を伝えるため、長蛇の列が出来ました。四日間くらい続きました。

ありがたかったボランティアの活動

二十八日九時にボランティア本部を設置しました。そこで受付、高齢者の被災住宅後片付けを手伝ってもらいました。またボランティアの人たちの寝泊り場所を、延命山荘や役場の三階に確保しました。ボランティアは、十一月二十三日現在、延べ一四七七人から来ていただいています。これからも仮設住宅への引越しや除雪要員などで、ボランティアの数は必要になるものと思われます。中には、ボランティアを動かすボランティアをしていただいています。そのおかげで、他ではボランティアは来ても、何をしてよいか分らないということがあるけれども、わが町には、ありがたいことに、それがありませんで、たいへんスムーズに活動してもらいました。ボランティアの仕事は、医療スタッフ、要保護家庭の片付け、一般

家庭の片付け、公共物の片付け、炊き出し、家屋の被害調査など、いろいろな分野で仕事をしてもらっています。高速道路通行料が割り引かれるのですが、県外の方がものすごく多いのです。特に小国町と姉妹都市を結んでいる、武蔵野市から夜を徹して水と食料を運んできてくれました。技術職員から現場の水道管修理など、今も家屋調査に来てもらっています。

質問　役場内での書類も混乱したのではないか。

答え　それも大変でした。書類が床に散らばって、手が付けられない状態でした。昼間に手があいている人から、職員総動員で片付けに入りました。幸い、水害で庁舎が埋没することがなく、火災で書類が焼失することがなくて、とても助かりました。

質問　救援物資が続々来て、その仕分けも大変だったのではないですか

答え　その通りです。外部から水と食料がどんどん入ってきました。たちまち倉庫がいっぱいになりました。役場倉庫がいっぱいになり、産業会館も置き場になりました。避難者一回七千二百食で、ドンドン食料がはけるので、分配もたいへんでした。ありがたいことに救援物資は、水や食料、その後、防寒対策の毛布や衣服がドンドン入ってきました。県を通じてくるのもありますが、小国町を特定してくるのも多くありました。ありがたかったのは、給水車なども頼んだのですが、集落では昔から独自の湧き水があって、都会ほど不便は感じなかったことです。御飯ものは自家用備蓄米が十分あり、燃料もプロパンガスでしたので、都会ほど不便は感じなかったと思います。

法末・山野田集落の被害状況

質問　避難指示や避難勧告はどのように出されるのですか。

答え　各集落の情報が総代さんから伝わり、総代さんを通じてこちらの情報も伝えられました。総代さんはたいへん苦労しましたが、それをネットワークにしたので、たいへん助かりました。集落というミニ自治体組織のおかげで、立ち上がりには混乱が少なかったと思います。これが農村特有の強さです。避難勧告は市町村長が出します。その上が指示で、勧告より強く、強制力を持ちます。町長は、危ないとなれば、町民の生命財産を守らなくてはならないので、勧告を出しました。一定地区を指定するのは、地割れがあり、崩壊の危険があり、道路が閉鎖されて孤立化するようなところに出します。二十五日に山野田の九戸二十五人に出しました。それまでは、情況がつかめなかったわけです。二十六日に、漸く法末の五十四戸、一一九人に避難勧告を出すことになりました。法末までは、地震から四日目の夕方、地元の業者を総動員して、何とか一車線でも道を開けてもらうことが出来ました。小国沢の「山野草の家」まで迎えに出たりして、この二つの集落を優先して避難してもらうことにしました。平場の人たちは、七箇所の避難所に避難してもらうことにしました。余震が続く中で、下村集落の十一戸が、裏山に亀裂が入り、危険だというので、避難勧告を出しました。とにかく二次災害を起こさないということで、一定の地域の塊で避難勧告を出しました。避難民の要望で、風呂が使えないかということで、養楽館の風呂をなんとかしなければということになり、途中の水道管を補修して、翌日には避難者から

入ってもらいました。今後の教訓として、避難訓練はかなり大掛かりにしなければだめですね。一番大事なのは、職員の教育が徹底しなければということです。次に集落機能がしっかり働かないと町民が混乱してしまいますね。正しい情報を瞬時に伝えて協力してもらう体制づくり。それが、こうした災害の際の基本ですね。

公共施設の耐震構造

質問　今回の教訓を元に今後見直しが必要なことは何ですか。

答え　順番から言うと、公共施設は耐震構造が必要だということですね。それが無理なら、耐震補強してやらないと、今後の避難所の確保などには、これがどうしても必要ですね。公共施設が耐震構造であれば、すぐ使えますからね。それに集落の総代さんが組織の中との連携をうまくやる。それからライフラインが途絶した場合の対応を、瞬時にやる必要が出てきます。専門業者との連携を取りながら、業者との防災協定の形を取らないとだめですが、近隣の業者だけでは仕事が集中してしまい、関東とか近県までエリアをひろげる、遠くの地区の自治体や専門業者との協定が必要になります。今回は友好都市武蔵野市の応援が非常に心強かったので、今後もこうした友好都市との連携が必要ではないでしょうか。

山野田・法末の復活を

質問　今後の課題は法末・山野田の過疎が進むのではないですか。

答え　法末について言えば、仮設住宅の申し込みは、一応治せば住みたいという希望に変わりはないのですが、家屋の被災状況は平場より非常によくない。半壊状態以上が七割以上ありますが、大規模半壊までは、補強して住みたいという気持ちが強いようです。集団的に仮設住宅入居を促したのは、冬期に道路確保が出来ない。それといたるところに地すべりの危険性がるという二点で、苦渋の選択をお願いしたということがあります。山野田について言えば、道路は確保されているので、半壊状態もあり、九戸しかないのですが、半分以上仮設に入居せざるをえないとなると、残りの方が集落に戻っても、集落機能の維持が出来ないだろうと思います。そうなれば、集団でまとまって安全な生活に移る方がいいでしょうと、了解してもらいました。仮設住宅を出なければならない二年後のことについては、今後は、山野田や法末の皆さんとよく相談して決めることだと思っております。法末は、専門家から見てもらっているのですが、山に亀裂は入っているが、大規模地すべりは起こらないだろうということなので、雪解け状態を見て、来春辺りから、皆さんの意志を確かめたいと思います。農地の破壊状態と高齢者層の多い現状から、どうやって生活の糧をえるかと、むずかしい判断を迫られるのではないかと思われます。これを失うのは大きいですね。私自身は集落に戻って耕作してもらいたいですね。これを村づくりの出発点にしてもらいたいですね。

公共部分被害額六十四億円

質問　公共建物の破壊状態は？

答え　中学校も今の体育館を仕切って仮教室にし、その後、グランドに仮校舎を作ってそこへ移って、体育館を使えるようにしようと考えています。十億という単位の金が要るわけですから、新しい校舎を作って、どうぞといっても最低二年はかかります。

質問　国や県の補助はどの程度出るのですか。

答え　激甚災害にしてくれれば、高率の補助が出ますが、金のあるなしに関わらず、どうやって子供たちの教育環境を整えるか、頭の痛い問題ですね。公共部分の被害だけで、六十四億の被害を受けていますが、下水道で二十億円、中学校校舎で十二、三億円かかるだろうと見ております。下水道も二年と長丁場、学校も二年の長丁場、公共的団体が八億円で、国県道二十億円、残りの民間が二百六十四億円、合計三百五十億円程度の被害状態です。

質問　来年の合併への影響はありませんか。

答え　合併の日取りは変えないという申し合わせをしています。災害復旧十七年度の当初予算をどう組むか、これから出てきます。今回の災害でありがたかったのは、友好姉妹都市武蔵野市の応援態勢で、これには、本当に頭が下がりますね。

助け合った住民の底力

質問　個人としての地震の感想は。

答え　田舎の住民の行動力は、都会のものと違って、隣近所を思いやるという気持ちはいい

ですね。集落の総代と住民の間のコミュニケーションはうまくいっているというのが、何よりの強みですね。この住民の結びつきの強さが底力ですね。これがあったからこそ、これだけの災害の中で、二次災害を最小限の被害で食い止めることが出来たといえるのではないでしょうか。

質問　ありがとうございました。

第五章　地割れの恐怖の中で

太郎丸　保　坂　利　雄

雨の多い秋だった。平成十六年十月二十三日、午後五時五十六分。その日の夕方、こんな陽気では、来春のどんど焼きの藁の集まりが悪いだろうと思って、仏心を出して、山の田圃の土手より、萱を十束ばかり刈り取って集落作業場に運び、自家の作業場のシャッターを下ろした途端、グラッグラッと大揺れしたのは、地震とは思わず、体調がおかしいのかと感じた。途端にドーンと特大の地鳴りとも何とも形容しがたい、天地が張り裂けるかと思われる大揺れが来て、立っていることが出来ない。地面にしゃがんだまま、身体を支えるのがやっと。動くことが出来ない。これはただの地震ではない。建物は倒れるだろうし、地割れがするに違いないと、そら恐ろしくなった。家の方を見たら、台所に明りがついている。おそらく妻は夕食の仕度の最中であったろう。すぐに駆けつけたいけれども、身体を動かして這うことも出来ない。この間の時間のなんと長かったことか。

大揺れが一区切りしたので、やっと家にたどり着く。真っ先にプロパンガスボンベの元栓を閉める。声をかけて家から出てきた妻と共に、作業所前の少し広い道路に、隣の老夫婦とともに避難する。とにかく家が倒れても大丈夫の場所に居なくてはと思った。またしても、大きな地震。それがまた最初に近い揺れ、一通りの揺れではない。これはただの地震ではない。

ふと上坂家の地震の図が脳裏をかすめる。昔の人は、情報蒐集もままならぬ時代に、よくあれだけの絵図を描いたものだ。とにかく、家が倒壊しても、安全な場所に居なくてはならない。そのことだけを考えていた。妻の安全を確認した途端、隣家の中沢政栄さんのことが心配になった。地震と共に停電となった。家の中には九十歳の老夫婦が居るはずである。車があった。ヘルパーさんが避難場所に連れて行きたいといっていた。そうだ、ヘルパーさんも家族が心配だろう。当然のことである。夜になると寒くなるだろうからと、もう一枚厚いパジャマを着たところへ、義弟の保坂寛さんが来たので、二人でヘルパーさんの車に乗せる。布団を積み込もうと思ったが、壁土が大量にベッドの上に落ちていて、布団が取れないので諦めた。ヘルパーさんに太郎丸の集団避難場所、農協倉庫前広場に連れて行ってもらう。

妻のところに戻ると、隣家の保坂富士夫さんは、高校生の長男と長岡へ勤めの長女が帰って来ず、ケータイで連絡が取れないと心配している。誰が連絡してきたのか、農協倉庫前に集まるようにということで、とりあえず指定場所に行く。大勢の人が集まっていた。青いビニールシートも敷いてあった。余震は絶え間なく襲ってくる。それも大きいものばかり。小国酒造の本蔵の壁の表面のモルタルが全部落ちている（これは後の余震で一部本壁まで落ちることになる）。上小国小学校に集団避難の情報が入る。三桶に嫁いだ娘も心配して見に来たという。村の当局者が小学校に行ってみたら、もういっぱいで体育館の中には入れないという。

誰もが、迫り来る夜の闇の中で不安を募らせている。こんなにも大きい地震が、何時止む

とも知れず続くことは、聞いたことがない。マイクロバスに乗車した妻のところに行くと、「インスリン」の注射をしたという。夕食直前だったので、当然であるが、食事をしないと血糖値が下がり過ぎる恐れがある。急いで家に戻り、食卓の上にあったパン一個とビスケット袋を持って、妻に渡す。食事の心配の後は、寒さ対策である。何しろ、着のみ着のままだったので、夜の訪れと共に冷えてくる。今夜は自宅に戻れないだろうから、余震の中、懐中電灯を頼りに、厚物を持って、バスに戻る。誰言うことなく、車の中なら地震は大丈夫という。

夜が深まってくる前に、みんな自家用車の中に入って行った。中沢さん夫婦も、本家の人が車庫の中に用意が出来たといって、連れて行ってくれた。だんだんとマイクロバスの中の人々が、自家用車や車庫に帰っていって、とうとう天理教の人と私たち夫婦だけになった。余震が何時止むか分らないし、町道の一部が陥没しているので、注意しながら教会の若夫婦に自家用車内に預かってもらって、自宅前の軽トラックの中に入る。隣家の保坂富士夫さんの子供たちは帰られたのだろうか。狭い軽トラックの中、二人で足も伸ばせず、寒さを防ぐため、布団を一枚持ち込んで、具合の悪いラジオを聞いて、余震におびえながら朝を待つ。

夜が明けて見ると、住宅の煉瓦は倒壊、家の中の戸は、全部外れ、外側のサッシの戸はずれていて、荷物はメチャメチャ、その上に壁土が落ち、食器類は割れ、足の踏み場もない。木造の作業所は東の方へ二尺くらい傾き、その中は勿論、鉄骨の作業所もどうしようもなく散乱。穀物入れより米袋は出ているし、十三俵入った菜庫までずれている。コンバイン・トラクターは掘立小屋なので、無事だった。

二十四日になっても、余震は収まらない。それどころか、時折、大きな地震が来る。十月三十一日には、町民交流集会を予定していたので、細井事務局長宅に行き、中止を申し入れる。翌朝二十五日、メモで中止決定の連絡がある。早速会長・上地区の集落代表者宅をまわり、集会中止の連絡を取る。電話が通じないので、仕方ない。各地で道路の地割れがあるので、注意して車を走らせる。（この集会にバス手配の断りを二十八日に漸く連絡するミスもあった）法末地区は、通行禁止だと思ったら、全戸避難したとの事だった。

二十四日、柏崎より妻の弟夫婦（保坂肇）が駆けつけてきてくれた。「高橋至さん宅に行ったら、『みやもと（わが家屋号）のお墓は、お骨が丸見えだから、シートをかけた方がよい』と言っていた」というので、墓地へ行ってみる。村中のお墓はほとんど、正常なものはないといってよいほど、見事に倒れている。我が家の墓は昔のものなので、四人で何とか組み立てられた。ついでに本家の墓も直してくる。妻の実家の墓は手のつけようがないので、そのままにしておく。

保坂肇さん夫婦に勧められて、その日の夜より、柏崎へ避難生活をすることにする。夜八時頃、東京にいる慎一郎（長男）が富山空港経由で駆けつけてくれた。二十五日には息子と肇さんの手伝いを受けて、傾きかけた作業所より、米を初め、子供たちの使った教科書・参考書類の入ったダンボール約四十個及び、角材など重いものを、余震の合間を縫って、鉄骨の作業所の外に下ろす。倒壊して隣家に迷惑をかけると困るので、自宅のことなどかまっていられない。二十六日に自宅の煉瓦倒壊の上にシートを張って、雨漏り予防対策。二十七日

にはまたしても、大きな地震あり。絶え間なく襲う余震と電話の不通、水道も電気もガスもない生活は、情報不足もあり、不安と焦りの連続だった。

息子が二十五、二十六日と十一月三十日より三日間、そして、十一月七・八・九日と三日間は、妻の妹夫婦・末娘が片付けに来てくれたので、傾いた作業所も壊してもらい、自宅も大まかな整理をすることが出来た。ライフラインも十一月三日までに終ったが、妻はすっかり地震恐怖症になり、一ヶ月が経った現在も、気のみ気のままである。

飲料水を始め、食料、日用必需品の見舞いや激励の電話を、大勢の方々からいただいた。普段交流している人達はもちろん、思いもかけぬ人からも見舞金をいただき、人の情の温かみをしみじみと感じ、復興の誓いを新たにしているところである。

第六章　病院で体験した中越地震

楢沢　富　沢　敏　一

十月二十一日（木）曇りのち晴

厚生連長岡中央綜合病院の眼科で、白内障と言われたのは、四年ほど前だった。以来、外来治療を続けてきたが、今夏、更に左眼に網膜上膜に疾患が見つかり、手術が必要になって三週間の入院が宣告された。

昨夜、来襲した台風二十三号の余波を気にしながら、倅が休みを取った車で、家内と三人

長岡に向う。

穐田をいざ入院へ明眸へ　陵霧

指定された午前十時に、本館三階の眼科病棟一三一一号室に入った。六人部屋で泌尿器科の患者もいる。諸手続きが終る頃、薬局の方が来て、入院中の投薬計画を説明した。ついで、担当の看護師岩野さんから、当分風呂に入れないので、午後一時に入浴して下さいといわれ、昼食後すぐに入浴して洗髪、髭も剃った。

午後三時、病室の近くにある診察室で、ミニ注射とか言って、九本も打つ。そして担当医船木先生から、大体手術の時間は一時間三十分ほどで、まず白内障をやり、その後で網膜という順序だと説明を受けた。前に看護師さんから、少し厄介な面があるらしいと聞いていたので、かなり冷静に対応できたと思う。明日の手術の仲間は、私のほかは六、七人。みんな白内障らしい。

その頃、外界は曇りから日が射すまでに天気が回復していた。窓から見る桜の名所福島江の桜木が、こころなしか紅葉の始まる気配を見せている。

桜照葉こころに満たし明日手術　陵霧

夕方六時半、私ども三人が呼ばれて、眼科の船木治子先生から、病状および手術方法について、詳細なお話があった。間違えば網膜剥離の危険性も考えられるようなニュアンスを感

じた。七時近くにおわり、早速家族は帰って貰った。

明眸へ臨み大きもそぞろ寒　陵霧

（二日後に未曾有の中越大地震に遭遇するとは、神ならぬ身の知る由もなかった。そして病床より地震に比重を置く日記に変わってゆく。）

十月二十二日（金）晴

起床午前六時、そこそこ睡眠は取れたようだ。手術はその大小を問わず、身体に刃を入れることは、人生における大事に違いないのだ。

満腔の信頼を寄せる船木主治医先生なので不安はない。「目は口ほどにものを言い」または「目は心の窓」ともいう。ものを見るだけの器官ではない大切さを実感する。

今日は晴天なので、さぞかし家では、台風のために稲架から外した豆を架けなおしているだろう。

手術は私の希望で少し早めて貰い、午後三時三十分からだ。もう午前に鈴木看護師さんが来て、手術前の点眼、手術衣の着方、その他事前に必要な事務を伝えた。

午後一時より三十分間隔で左眼点眼を五回やり、点滴を始め、そして血糖値の検査は、一〇九とか。筋肉注射を尻に打った。これは手術に際し、筋肉を柔らげると聞いた。

定刻少し前に家内と倅、そして埼玉県戸田に世帯をもっている娘が駆けつけてくれて、血

族が揃う物々しさだ。大仰になってどうもてれくさい。

時間通り部屋から寝台に乗せられ手術室へ、更に点眼をして点滴はそのままだ。先生自ら左側耳の付け根あたりに麻酔の注射、但し感覚はしばらく残っていたようである。

やがて睡魔に襲われて朦朧としてきたが、執刀の先生方の会話がはっきり聞こえてくるのも何か不思議だ。いわば、夢心地のような時間が流れていたのに、痛みを感じ出してきた。そろそろ麻酔が切れてきたのであろうか。思わず、「先生、痛い……何とかして」とわめくが、先生方は知らんふりで、全く黙殺である。もうこれは、終局にはいったなあと理解して、我慢がまんと思ったとき「終わりました」と先生の明るい声が聞こえた。

安堵した家族の顔に囲まれて部屋にはいったのは、ちょうど午後五時で、まさに予定通り一時間半だった。改めて両先生を初め、スタッフの方々に感謝申し上げたい。

術後の痛みは全然ないし、あまり遅くなってはと思い、家族に帰ってもらった。たいへん迷惑をかけたものだ。夜になっても痛みはなく、すぐ眠った。

十月二十三日（土）曇りのち時々晴

ベッドに静かに寝ていなさいとの指示なので、勿論朝のトイレはポータブル便器に部屋で足す。食後の薬は従来のものに二種増えた。一種は、痛みをやわらげ、炎症を抑える、もう一種は、痛みを止め、胃の荒れを防ぐ薬という。今日は、新潟大学の先生の出張診療の日だ。経過は良好なので、同じ階なら歩いてもいい、トイレも許可された。

昼ごろ、家内と娘が様子を見に来た。倅は勤めなので、職場に行ったようである。昼食後にすぐ点滴—これは昨日と同じで、マキンビームという抗生物質である。午後二時少し前に家内は帰宅した。あまりテレビは見ないほうが、目のためにはいいと思っていたが、「なんでも鑑定団」は別だと、見終わったのが午後五時半、あとは夕食待ちだ。まもなく出された食事が始まった直後、突き上げて、叩き落すような激しい衝撃が襲った。地震だと患者が騒いで廊下に出たが、すぐにまた同じくらいの大きさのものが起こった。これが「中越大地震」の発生だったのである。

電話は、呼び出し音はなっているが、応答はない。何度繰り返しても同じだ。ちょうど夕食の時で、火災が懸念されたが、通じたのだから、おそらく大丈夫に違いないと無理に納得した。

午後七時近くに電話を掛けたが、不通になった。テレビで震源地は小千谷のように報じているが、どうして隣接の小国の情報が流れないのだろうか。そこで、役場に電話を入れたが、不通—。状況をとれないのは、不安を増幅するばかりである。

午後七時三十分頃だったか、患者は一階広場に集まるようにいわれた。緊急時なので、患者を一堂に置かないと、避難その他の行動に移行する場合に、混乱する憂いがあるからだろう。

術後まだ一日、安静が必要なときなのに、そんな事言っていられない。まだ夕食の済んでいない患者もいたようで、みんなにおにぎりやパン、水、牛乳その他が配られた。設けられ

た災害対策本部に、小国の様子を把握してほしいと頼んだところ、いろいろと手配して、インターネットでは「小国」は、四弱の震度だったとか、このように情報そのものが、混迷と錯綜を極めていたのである。午後十一時過ぎにようやく病室に戻った。余震なお続く——。

十月二十四日（日）晴れ

午前五時前に目が覚めた。というよりほとんど眠れなかったのである。ただ、不幸中の幸いというか、私の手術を心配して埼玉から帰郷していた娘がいて、どんなに心強く家内の支えになったろうと思うにつけてもここにいて、なんとも不甲斐ない。午前六時の点灯を合図のように、電話へ行ったが、空戻り。朝食後、倅の長岡の職場へ試みに携帯を入れたら、通じた。これは小躍りするほど嬉しかった。

倅が言うには、小国に行こうと思ったが、入れないようだ。ただ今小国町は、孤立、電話は町役場へ緊急無線しか通じていない。そこで、柏崎消防署へ連絡したら、「小国は死者、火災、家屋の倒壊などなし」ということで、やや安心した。そして長岡の家族は避難して家に居なかったという。点滴は午前九時四十分に終ったら、ちょうど田島峠が通れそうだから小国へいって見ると言う。何もなければいいが、心配だ。相変わらず余震が続き、午前十時三十分かなりの揺れだった。午後三時過ぎに倅の携帯へ電話を入れたが不通になっていた。午後五時のニュースで小国の様子が少し分った。電話は小国全域で通話できず、電気、水道、ガスは不明。国道は二九一号がだめ、長岡からの国道も小国～松代方面が不通、四〇三号・四号

も不通と報じた。小国町法末集落は孤立とかで、たいへんな災害だ。夜、電話したが、依然として通じない。「しばらくお待ち下さい」だけだ。電話局をうらむことしきり。

十月二十五日（月）晴れ

新聞を購読する人が、部屋にいて配達人が来るので、余分があるという日報を読む。

朝食前に、もう日課になった電話をしたが、まだ、「しばらくお待ち下さい」だ。暫くとは、ほんのわずかな時間を意味する言葉だと思うが、日が変わっても「しばらく」とは腹立たしい。

汚れた眼帯を取り替えてもらい、朝の点滴をしていたら、倅がやってきた。やはり田島峠だけが、小国をつなぐただ一本の道のようだ。家は、二人とも無事で何よりだった。建物は水回りの被害が多く、特に浴室のタイルが無残に壊れたらしい。そして内壁が玄関を始め、階の上下を問わず至る所ひびが入ったという。心配の建物は眼で見る限り、傾斜はなく立っているというので、先ずは安堵した。

午前十一時四十分、埼玉県上尾の妹から看護師詰め所へ電話が入る。なかなか連絡が取れず、心配したという。一応元気だから、他の弟妹に伝えてくれと頼んだ。

今日の診察は二階の外来診察室だ。経過は極めて順調なので、回復は早い。退院は今週末か、来週の頭あたりかも知れないといわれた。これは嬉しいことだ。岩野看護師さんが点滴に来て、雑談のおり、小国町立診療所に看護学校の同期が居るとかで驚いた。そして話が弾む。

夜七時前に、恒例の家への電話で、漸く通じた。思わず万歳を叫ぶほどだ。日頃何とも考

えていない、ごく当たり前の電話なのに、この度の災害で改めて生活する上で、大切なものであるという教訓を得た思いである。

十月二十六日（火）

一日三回の点眼は変わりなく行われる。点滴が終り、今日からフロモックスという錠剤になった。これは感染の原因となる病原菌を殺すことにより、炎症などの症状を治したり、予防したりする薬である。

どのくらい普通の生活に戻ったのか。電話したら、昨日の電話に続いて、今朝は水道が復活したと喜びの声を上げていた。本当によかった。あとは、電気とガスだ。

十二時三十分診療のために外来診察室に行く。視力検査で〇・七まで改善された。いままで新聞を読むときには、老眼鏡だけでは足りず、更に天眼鏡を使う不自由さであったが、すっかり解放されて本当にありがたい。これもひとえに、国手船木先生の卓越した手腕の成果に他ならない。

もう髭剃りも、洗髪もいいとのこと。早速五日ぶりの髭を剃った。夕方ぐっと冷えが来た。今の季節なので仕方がない。夜家から電話があって、電気は法坂あたりまで来たので、明日は家まで来るだろうとの話だ。余震止まず——。

十月二十七日（水）曇りのち雨

今朝は寒い。午前六時過ぎに配達の方が来たので、日報を読むと、法末集落の孤立状態が続いていたが、ようやく通れるようになったという。朝の点眼に来た看護師さんの両親は小国の人で、K集落におばあさんがいるらしい。他にも小国ゆかりの方々がいる様子で、朗らかな活躍こそ祈りたい。

午前九時四十分頃に震度六弱の激しい余震が来た。その後も揺れが続くので、やむなく外来の診察を中止した。このような事態は、おそらく初めてのことであろう。

勿論、入院患者の診察もなかったが、昼過ぎに先生がわざわざ病室に来て言われるには、「こんな事だから不測の状況に備えて、幸い経過もよいので、退院を早めたい。病院の建物も老朽化していて、心配だしね」具体的に何時退院といわれなかったが、趣旨は理解できた。これは、単に眼科だけでなく、退院可能な患者みんなへの要請だったようである。

早速、私の病室も騒がしくなった。長く居たらしい六日町の青野さん（九三歳）が退院し、次いで児玉さんは市内だったか、そそくさと帰った。逆に病室に誰もいなくなったので、転室とかで、山古志の松崎さんが隣のベッドに来た。この人は、入院中の外泊で家に居た時に、地震にあい、急遽ヘリコプターで小千谷市小粟田原に下り、あとは、救急車で病院に運ばれたという——。

夕方、家では待望の電気が点いて、暗闇が解消した。テレビは見られるし、一気に落ち着いたと電話が来た。そうに違いない。よかった。今日は一日寒かった。夜家へ退院が早くなると電話をしたら、「大丈夫か、予定の三週間でなくても、せめて来月三、四日までは、置

いてもらいたい」と不安がった。余震更に続く――。

十月二十八日（木）晴れ

昨夜から今朝にかけて余震。大地の神よ、早く逆鱗を解いて、平和に戻して欲しい。

午前九時を回った頃、倅が来て洗濯物を持ってゆく。十時少し前、外来で診察があって、明日から何時でも、退院していいとなった。万歳と心の中で、思い切り両手を挙げた。病室に帰ってすぐ家に電話して、明後日（三十日）午後退院することを話した。何か肩の荷がすっかり下りた感じで、ここに来て初めて階下の売店まで行き、好物のどら焼きを買った。ささやかな独りのお祝いである。担当の山口看護師さんに三十日に退院することを告げたら、午後の点眼から自分でやることになり、指導を受けた。眉毛に触れないようにという条件付なので、上から落す関係で、なかなか肝心の眼に、うまく的中しない。

当初から煮る、焼きのガスを心配していたが、カセットガスを入れたガラス台を心配していたが、カセットガスを入れたガス台を使用して、間に合わせていたらしい。

少し心に余裕が出来たので、歳時記をめぐる。この本は百科辞典的な要素を多分に持っているので、俳句愛好者だけでなくて、広く一般の方にも、お勧めしたい良書である。そこで駄句

虫眼鏡探さずに読みうそ寒し　　陵霧

山装うよく見え人生変わるかも　　陵霧

十月二十九日（金）晴れ

午前五時に急患の入室である。北魚沼郡広神村から、救急車しか通さない高速道を走ったが、全線がガタガタだったというが、よく来たものだ。以前入院していた人で、小水が出なくなったとかで、すぐ治療して入院の必要はないといわれた先生に「近くの病院で処置できるから、こんな時、遠くまで来なくていいから」と指導されていた。付き添って来た嫁さんは、「帰りはどうやっていくか、タクシーまかせだねー」とこぼしていた。

昼頃倅が来て、これから学校へ避難している子供の所にいって、夜止まり、明日の退院の時間には、来てくれるとか、いろいろと忙しそうだ。午後になって外来で診察、先生に「退院後も六ヶ月は気をつけて下さい。一週間後に診せて下さい」といわれた。

夜、読みかけの小島直記の「人生まだ七十の坂」を開いたが、眠り薬の役目を果たしたに過ぎない。

十月三十日（土）曇り

三週間予定が、十日で退院の運びになったのは、空前絶後とも思われる、いや思いたい。中越大地震に遭遇したことも、勿論あるに違いないが、なによりも術後の順調な経過をあげ

なければならない。何回も繰り返しても足りない感謝である。

昨日退院した吉沢さんは、長岡市内の駅通り辺に住む話好きの人もそうだったが、その後、同室に入った二人の高齢者も、すっかり前立腺の疾病患者である。最近注目を浴びている病気なので、そのことを、目の当たりに実証した思いである。

午後一時、丁度車が来て病院を出た。沿線の被害はどんな様相なのか、怖いものを見るせつなさで、窓外に視線を走らせ続けたのである。（終）

第七章　直感！　震度七

法坂　山崎　正治

その日その時私は、いつものことながら一番風呂にはいり、自分の部屋でゆっくりくつろいでいた。誰が見ているわけでなし、大胆にも素っ裸で心地よく吹き出てくる汗を拭きながら、ボンヤリしていた。……と、途端にドドドドドッと腰掛けている椅子を跳ね上げて激動が走った。すわ地震！　しかもこれは震度七だと直感した。

それと言うのも、さる八月八日、ある会社のバスツアーに参加して、東京は御台場付近にあるビックリサイドを見学した。広い広いその会場の一郭に「地震体験館」があったので、そこへはいった。私が入ると満席になり、すぐ始まった。微震から始まって徐々に震度が上がっていき、中部日本海地震、阪神・淡路大地震と続き、最後に「これが震度七です。しっ

かりつかまっていてください。」とアナウンスがあり、ドドドドドッと腰掛けている椅子を跳ね上げて、ものすごい揺れが始まった。これは模擬の地震だと分っていても、今にも潰れるかと心配するほどの激動だった。こんな地震が来たら堪ったもんじゃあないと、痛切に感じていたからである。

ドドドドドッと来た瞬間、二重構造の本棚がドーッと倒れ掛かった。押えようとしたが、押えきれるものではない。途端に停電。「オーイみんな何かの下へはいっていれ」と怒鳴りながら手探りで食堂へ出た。とにかくパンツと下着くらいは、……と脱衣場から、取り出し、手早く着た。

倅夫婦は未だに勤めから帰っておらず、孫ら三人（高三女・高一男・中二女）はそれぞれ三階の自室におり、妻は居間でテレビを見ていた。もう直ぐ夕食の時刻で、今晩のメニューはカレーライス。すっかり出来上がっており、孫らは割合に落ち着いた行動をした。一番上の高三の孫は、妻を誘導して屋外に逃れた。二番目の高一は、中二の妹に携帯電話を持たせて外へ脱出させた。そして、裸の私に、

「じいちゃん、これ着て」

と衣服を渡してくれた。自分の上着とジーパンである。

「ありがとう」

とそれを着用した。そうこうするうちに、脱衣場にあるボイラーの送湯菅が折れて、どっと水が噴出した。あわてて脱衣籠を廊下に出し、菅の途中にあるバルブを閉めるが、水は止まらない。

「じいちゃん、早く出よう」
「よし出よう。懐中電灯を取ってくる」
と居間に引き返した。常に置き場所は決めてあるのだが、最初の揺れで他のものと飛び散り、散乱している。とにかく見つけて靴を履き、玄関に出た。その時、またドドドドッと来た。雪除けの手摺に掴まったが、雪除けそのものが大揺れで今にも倒れそうだ。落ち着け、落ち着けと自分に言い聞かせながら、漸く外へ脱出した。近所の皆さんも桐沢集落へ向う道路の付近に集まっていた。
そうだ、車を出さなくちゃならない。今日は飲み会で倅も車を置いていたのだ。揺れが収まったので、さっそくガレージへ。幸いシャッターは開いたが、棚が倒れたり、積んでおいたいろいろな物が落ちたりして、車をだすなど到底出来ない。でも何とかしたいと邪魔物を取り片付け始めたが、また凄い揺れが襲ってきた。
「じいちゃん、やめよう」
「おう、やめた」
直ぐ車庫を離れたが、道路が波を打つような大揺れだ。道路に両手をついてしゃがみこみ、おさまるのをひたすら待つ。
「危ないから役場の駐車場へ集まるように」ということで、間断なく続く余震の中を、役場の広場に集まった。私の懐中電灯はラジオ兼用なので便利だ。三年ほど前、山梨放送の「待っていたぜ金曜日」に昔話で出演し、その謝礼にもらったものだ。ラジオによれば、どうも中

越地方一帯が襲われたらしい。役場は自家発電で灯がともり、町長以下職員達がポツポツ出勤し、対策本部が出来たらしい。
倅たちはどうしているか。孫に携帯で連絡させるが、全然通じないという。それぞれが薄着だから寒くてやりきれない。そこで役場のマイクロバスに入れてもらい、エンジンをかけて暖房を入れてもらったので、生き返った。その間にも余震が続き、バスが揺れる。
こうして焦燥と不安とで心許ない、悪夢のような一夜が更けていった。

あとがき

この冊子原稿は、平成十七年、小国町が長岡市に吸収合併した時から書き始めました。なんとかして小国の歴史を、小学生にもわかりやすく、知ってもらえるようにという願いを込めて書いたものです。平成十三年に小学校の副読本「わたしたちのまちおぐに」第六版の編集を終えた頃から、小学生にもわかる歴史読本を、という声を聞かされていました。そこで思い切って書き出したものです。

それが今になって、「町外の訪問者に小国地域を説明するために、テキストになる物を」と言われて書き換えたものです。さらにそこには、印刷費の関係で、地震関係のものも入れてほしいという要望もあって、このような本になったものです。

出来たら写真もたくさん入れて親しみやすいものにしたいと思っていましたが、資金の関係で、これまた平成二十年度末までに完成させてほしいと要望され、大急ぎで書き飛ばしたせいで、暮らしや言葉の変化など不満足なところ、書き足りないところも多々あります。いつかまた機会がありましたら、そういう欠をおぎない、満足に近いものにしていきたいと思っています。

平成二十一年二月

高橋　実

●参考文献

「小国郷土史」　昭和十一年
「小国町史」　昭和五十一年
閉町記念誌

●ご協力いただいた人々

法坂　山崎　正治　氏
太郎丸　保坂　利雄　氏
上谷内　池島　嘉和　氏
小国支所産業課
小国よっていがん会の皆様

小国ガイドテキスト
小国の歴史・地震丸かじり

2009年２月28日発行　　非売品

発行　小国よっていがん会
〒949-5332
新潟県長岡市小国町上岩田524-1
TEL(0258)95-2340／FAX(0258)95-5034

印刷　あかつき印刷㈱
〒940-2127 新潟県長岡市新産４-４-７
TEL(0258)46-9393／FAX(0258)46-9394